平成29年度

読書会感想文

市立竹原書院図書館

★29年度 開催日・課題本一覧表

開催日	書名	編著者名	出版社
4月26日	よだかの片想い	島本 理生	集英社
5月24日	半島へ	稲葉 真弓	講談社
6月21日	私はマララ	マララ・ユスフザイ クリスティーナ・ラム	学研パブリッシング
7月26日	スクラップ・アンド・ビルド	羽田 圭介	文芸春秋
8月30日	忘れられた巨人	カズオ・イシグロ	早川書房
9月27日	オーロラを求めて	星野 道夫	全国学校図書館 協議会
10月18日	鹿の王 上・下	上橋 菜穂子	KADOKAWA
11月22日	永い言い訳	西川 美和	文芸春秋
12月20日	黄色い皇帝	芝木 好子	文芸春秋
1月24日	光抱く友よ	高樹 のぶ子	新潮社
2月28日	ぶつかって ぶつかって	竹下 義樹	かもがわ出版
3月28日	今年の一冊		

◆ 4月課題本 ◆
『よだかの片想い』
島本 理生/著 集英社

顔にアザがある女の子に対して、どんな視線が向けられるかを様々な体験から大人はよく知っている。だが、自分が傷つけたかもしれないという記憶を持つことは少ない。

〈私の顔には生まれつきのアザがある〉

という最初の1行目をどんな思いで読んだか、ということを経験への入り口とした。身の周りにそういう光景があったと第三者的に思い出す人も多かったが、その成長につれて好奇の目に傷つくことが想像でき、我が子を見る親のように不憫に思ってしまうのは。読み手の生活年齢が影響するのかもしれない。

顔に生まれつきのアザを持つアイコは、作品に登場してきたとき23歳の理系大学院生である。これまで周囲の〈無自覚に同情する他人の優越感〉によって、アザを異形のものと刻印されてきた。

ところがそのつらい描写の部分が、はじめの10ページ程で終わってしまった。本人がそれまでの経験をくしゃくしゃに丸めて飲み込んでしまったような10ページだ。とは言え、彼女の周りの人には、その心の変化はわかっていない。

年頃になり本の表紙写真になることに期待した親は、アザを強調した写真の出来具合を悔しがった。だが、本人は、そういう反応をする両親が悲しかったのだ。かわいさや愛想笑いなどではなく、アイコの言いたいことは別にあった。〈私のアザは「マイナスなんかじゃない。最初から」〉

これが、両親や読み始めた大人に向かって言いたいことだったと思う。アザはアザであってプラスでもマイナスでもないという考え方が、次第に培われていったことが感じられる。だから、つらいことは早々に書き終わったとも言えよう。

アザについて何か言われる度に、庇おうとする親の心情が働く読みがある一方で、23歳の若さの潔さとも読み取ることができる。

「私の顔には生まれつきのアザがある。これが私なのだ」と1行目から宣言している。そのように自覚するまでには 喜怒哀楽さまざまな時をすごしたことだろうが、アイコは客観化して受け入れた。読み手が彼女の横に立ってその顔を見ていたら、清々しい気持ちにもなるだろう。あまりにも「見た目」にこだわる昨今の風潮への反発も含まれているだろうが。

だが、この心底の脆さも想像する。その脆さが『よだかの星』へとつながっていくのではないかと思える。

この作品の題名には「よだか」とあっても、本文では、真ん中あたりに数行だけ、宮沢賢治の『よだかの星』が登場する。だから題名からいっても賢治の『よだかの星』の余韻を利用しているのだなと思えるのだが、話し合ってみると、この作品に教科書で出会ったことがないという世代もあった。作者は、世のみんなが賢治作品を知っているという前提で書いたのだろうか。

賢治の「よだか」を知らなければ、「カワセミ」でも「フクロウ」でもよかったことになる。作者がこの題に落ち着ける前に、三つくらいの題名を検討したと何かの記事に書いてあったが、いずれも「よだか」はくっついていた。

例会では、賢治の『よだかの星』の思想をバックにしているだろうという線で話をすすめた。

もう一度『よだかの星』を読み直す。いつものように図書館から絵の描き手が違う数冊の絵本が用意され、「よだか」という鳥を探せる図鑑も何冊か提示された。(図書館でする読書会の醍醐味を味あわせてもらえる時間だ。)

賢治は、「よだかはじつにみにくい鳥です」と始める。

よだか=みにくい=アザ、という関係式は、これまでの大人の経験から一応出てくるが、よだか=名前も姿も自分が選択したのではない=アザは自分が選択したのではない、という関係式がアイコンによって強調される。

アイコンは、この作品について、理不尽すぎてすごく腹がたったという。自分ではどうしようもないことなのに、相手から醜いという価値観で否定される「よだか」を我が身に置き換えたのかもしれない。

賢治の「よだか」は、鷹に脅されようと、他に代わる者のない個としての自分を曲げない。アザがあるか無いかではなく、そのすべてが自分なのだというアイコンに重なる。

『よだかの星』の後半では、自分を解ってくれないと他を批判しているその自分が、羽虫や甲虫の許しも得ないのに命を取り上げている存在の現実に気づいた「よだか」を描く。そういう身を拒否するために「よだか」は星になろうとする。「よだか」には、捨身解脱願望があり、そのためには、地上に留まってはられないのだ。

顔のアザによって「自分・他人という違い」を経験してきたアイコンは、自分という世界を守っていて、誰が相手でも地上のわが巣を捨てることができない。とすれば、雛のように自分の世界から出ないまま片思いするしかないであろう。アイコンがそのまま突き進めば、ずっと「自分の世界からの片思い」で終わるだろうが、付き合ってきた映画監督の飛坂が制作した映画を通して、

〈新しい世界をあたえて、この殻を破ってくれる誰かを、私はずっと待っていた〉と気づく。

その新しい世界は、アザの否定や肯定というこだわりの殻から解き放つ。

法華經信者であった宮沢賢治の思想は、「捨身」という手段を文学的に表現し、「よだか」の飛翔に「殻からの超越」という願いを込めたのかもしれないとあらためて思う。

アイコは、宇宙という果てしない広さを身内に抱くことのできる「よだか」を、飛坂から贈られたのだ。新しい出発ができる。そして、いつかまた、超えるべき自分の殻に気づき悩み、出会いを得て、新しくなるだろう。

「よだか」という鳥は、読書会の語り合いを十分に引き出してくれた。

講師 吉川 五百枝

◆ 三行感想 ～ 会を閉じて忘れぬうちに ～

- ❖ 先生の解説で改めて自分が第三者の目線で主人公を見ていたと感じました。アイコが自分の殻を破ることができたのが、最後よかったかな…。Mr. 飛坂との出会いは彼女の人生の上で大きな宝物となったし、最後原田君の気持ちを知ったことで最後の殻が破れたと思う。(N2)
- ❖ 生まれつきのものを可哀想と思うことはその人を否定することになるということや、同情することに多少の優越感があるという文章にドキリとし、考えさせられた一冊となった。しかし、読書会では、全く違う方向に話は展開し、深い内容だった。あざのある自分の考え、感じていることに 新しい世界を与えて殻を破ってくれる誰かをずっと待っていたことが「片想い」だとわかり 本当に奥の深い読書会となった。(Y)
- ❖ 宮沢賢治の「よだかの星」をきちんと再読せずに読書会に参加して後悔しました。読んでいけばもう少し深く理解できたかもしれないのもったいなかったです。今回もいろいろな話が聞けて良かったです。(MM)
- ❖ 片思いでなく 片想いと気付きました。アザを通していろいろな人と出会いからをやぶっていく主人公が描かれていました。見た目より人との出会い 相手を思う気持ちが大切だと感じました。(TK)
- ❖ 構成もなく文章も平易でとても読みやすい小説です。でもドッコイそうはいきませんよ！貴方の心理状態をとわれますよ。内容は奥深いものが潜んでいますよ、本はじっくり読まないとわからない！熟読をおすすめします。(K)
- ❖ 「よだかの片想い」という題を目にして、すぐに「よだかの星」の絵本を読みました。読んで印象に残った文章は、飛坂さんの「一緒にいるっていうのは、相手を肯定しながら、同じ場所にいることなんだからさ、それは、立派な理由だし、責任だ。」という言葉です。家族、夫婦の基本だと思い自分にすごく突きささりました。又、アイコさんの母親が「アイコは、本当によい意味で普通に育ったの。性格も、価値観も…」この普通に育つこと母親が言うまでには、母親のどれだけの愛がつまっているの

だろうと感銘しました。(R子)

- ❖ 最初の数ページで作者の意見が書かれていたように思います。様々な「苦」をもちながら生き抜いていくには、「カラをやぶることができるかどうか」が、キーになると思う。24さいのアイコさんが、出会った原田君で終わったのは、良かったのかなと…。(E子)
- ❖ 人はそれぞれ姿・形が違うように。思いも考えも違って良いと。頭で分かっている自分自身を押し通してしまう。それを知りました。自分の心の殻を破れたことがはっきり分かった。私も新しい世界に一步でも早く入るぞ！(M)
- ❖ 「よだかの片想い」希望のある終わり方でよかった。ひとつひとつの言葉にそれぞれ違った受け取り方があり、それを聞けるのが楽しかった。(KT)
- ❖ 読書会の最も好きなのは自分では決して選ばない本が課題となっていること。又それが以外にも面白くて知らない作家の作品を知ることです。その上、メンバーの年齢層が幅広いこと。色々な方の話が楽しみです。違う意見を最後にまとめられる吉川先生の苦勞？は。これからもよろしくお願いします。(YA)

『よだかの片想い』を読んで

よだか、山や森にすむ夜行性の鳥です。ヨタカ目ヨタカ科の鳥なのでただしくは「よたか」体長は30cm弱。足は短く、歩くことが苦手です。昼間は木の上で、木のこぶのようにうずくまっています。飛びながら羽虫を食べられるように、大きな口を持っています。よだかは漢字で書くと夜鷹ですが、タカではありません。飛ぶ姿が鷹のように見えるため、この名前がついたといわれています。よだかは、じつにみにくい鳥です。

アザを初めて異物だと感じた。琵琶湖だとからかわれた日の記憶が熱を持って蘇った。いつも一方的な視線を向けられて、相手の好奇心や恐怖心を押し付けられてきた。だけど、それ以上に嫌だったのは、無視されること、見てみないふり。だからこそ、ずっと破ってほしかったのだ、当たり障りのない距離感を、そして理解してほしかった。私の考えていること、感じていることそして新しい世界をあたえてこの殻を破ってくれる誰かを、私はずっと待っていた。今やっと手を取ることができる。形ある湖から無限に広がるよぞらになったこのアザと。

宮沢賢治の「よだかの星」童話読みました。「よだかの片想い」よだか、何のことだかと思いました。賢治の「よだかの星」の題だけは知っていましたが、読んではいませんで、早速読みました。「よだかの星」は基本的には食物連鎖の話。弱者と強者がいて、それらがずっと連環している弱者であり、いじめられているよだかさえも虫を食べてしまう。

「よだかの片想い」は賢治の「よだかの星」の根底にある人間だけでなく万物のみにくい

心、思いが話の中にあると思っています。

理想と現実とに心悼む自分です。(M子)

題名からわかるように、宮沢賢治の『よだかの星』がベースにあり、現代版『よだかの星』ともいえそうな物語である。

主人公の24歳のアイコは、顔の左に生まれつきの大きなあざがある。人々の好奇心や恐怖のまなざしを向けられることに、ずっと苦しめられてきた。まるでよだかのようなアイコ。このアザさえなければ、と何度も思ってきた。若い女性なら、(男性であったとしても)美醜や他人の目が特に気になる年齢。尚更その苦悩は大きく、様々な影響を受けただろう。

そんな中で、アイコの今までのことが本になり、映画化することになる。その映画の監督、飛坂に出会い、恋をする。ようやく自分のことを理解してくれる異性と巡り会った喜び。純粹にまっすぐに向けられたアイコの恋心は、とてもいじらしく、可愛らしい。相手はたとえアイコに恋していなくても、その切ない思いに答えてあげたいと思ってしまうだろう。飛坂は最後まで、アイコに恋していなかったと思う。アイコの恋心に応じたただけだった。近づくようで、最後まで離れていたような二人の関係。でも飛坂は新しい価値観をアイコに示す。アザを「葛藤しながらも強く生きてきた証」だといい、「形ある湖から、無限に広がる夜空」に変えてしまう。

アイコは飛坂と付き合うことで、人と深く関わることを経験した。相手のことを考えることは、自分のことも客観的に見つめる機会でもある。そんな時に、その人にとっての新しい価値観が生まれ、再発見するのだろう。

初めのほうの話はとても興味深かった。小学三年生の時、アイコはアザを琵琶湖だと言われ、みんなに注目されて、ちょっと嬉しくなった。しかし先生が「なんてひどいことを言うんだ」と怒ったのを見て、クラスメイトの間に今まではなかった恐れと遠慮が生まれたというエピソード。アイコ自身も自分のアザが、世間ではひどいもの、可哀想な子であると思われることを、周囲の反応から知ることになった。アイコのいう「無自覚に同情する他人の優越感」という表現は、痛いところを突くなあとと思う。価値観は外側からやってくるのだなあと、つくづく思った。そして勝手に自分の中で作り上げてしまう。その畏に気付けるか、気付けないか。その呪縛に自覚なしに囚われるか、わかっている囚われるか……。

アザがあるからこそ得ていたものに、アイコは気付く。周りに振り回されず、強く生きようと思えたこと。アザを通して他人を見ることで信頼できる人とだけ付き合っただけのこと。アザは人々を篩いにかけて、まるで盾のように、周囲からアイコを守っていたのだ。「だけど実際は、コンプレックスを肥大化させて、意地になっていただけじゃないだろうか。自分のことはすべて認めてほしくて、相手の弱さは受け入れられなくて」。その守りの中で、アイコはアザを言い訳にして、逃げていた自分にも気付く。

アイコにとってアザとは、生まれたときから体の一部だ。アザがあることから経験したつらさが、今のアイコを作り上げてきた。痛みを知るからこそその、強さと弱さ。アザがあるから、今のアイコがいる。もしアザがなかったら、違うアイコになっていただろう。いざレーザーで治療して消してしまおうかと思った時、あらためてアザと自分の関係について考えるエピソードも興味深い。本が出版、映画化したとしても、周囲の状況は以前も今も大きくは変わらないだろう。けれどアザを受け入れるしかないと思うのではなく、あることを受け入れようという気持ちの変化は、これからのアイコの生き方を変える。きっと状況は変わらない。でもアザを「今やっと、手を取ることができる」、あるべきものとして受け入れようと思ったアイコにとっては、大きな価値観の変化だ。そのことに気づききっかけになった飛坂は、恋人でなくなったとしても、大切な人であることには変わらない。

よだかは譲れなかった。鷹に殺されることになったとしても、〈よだか〉という名前を捨てて、〈市蔵〉にはなれなかった。醜いと嫌われようとも、自分を捨てることはできなかった。

「ただこころもちはやすらかに、その血のついた大きなくちばしは、横にまがっては居ましたが、たしかに少しわらって居りました」。よだかは誰からも受け入れてもらえず、本当の自分を理解してもらえないから絶望して星になったのではない。よだかのプライド、命そのものが燃え上がり、星になったのだと私は思う。燃えていたのは、よだかの美しい気高い想い。よだかは自分の力で、自分らしく生きるために、自分を守ったのではないかと思う。アイコも、今まで周囲から自分だけを守ってきた。でもこれからは自分を守るだけでなく、周囲もまた守っていきける強さを、自分の中に見出したのではないかと思う。星の瞬く夜空を抱くことによって。(C)

顔にあざのある若い女性アイコの想いを寄せる男性への溢れるような想いを真摯な姿に清々しさや好感を抱かせ若い頃を思い起こさせてくれる。

ひよんな事でアイコが本の表紙を飾りそれが映画にもなる。その監督飛坂を知ることで話は展開する。

若い故の新鮮で純粋なアイコの想いと飛坂の想いとはずから違っている。映画完成後の二人の対話はタイトルの「片想い」に終わるが飛坂の監督人生の波に乗れなかったアイコに逆にホッとさせる。

アイコをずっと等身大で見ていた原田君の存在が、又アイコに人の優しさや人に想いを寄せることへの素晴らしさを与えてくれるに違いない。(YA)

(ああ、そうだったのですね。だから『よだかの片想い』なのですね……。)

読書会に参加して初めてこの作品の尊さや奥深さを痛感しました。

宮沢賢治の『よだかの星』の視点から課題本を再度読んでみると、形式的には、題名だけでなく作品の書き出し文から終末の一文まで似ています。内容的には、主人公アイコが感じていた疎外感はやだかのそれですし、アイコの映画監督に対する罪悪感はやだかの小さい生き物へのそれですし、アイコのアザが無限に広がる夜空になったようによだかも星となって光り輝いています。

まさに宮澤賢治の『よだかの星』の世界が広くそして奥深く漂っていたのです。ブックデザインや中表紙も『よだかの星』を想起させるものになっているのも納得しました。

「わたしはわたし」なのに周り人には「アザの人」と捉えられ、幼い頃からずっと生きにくさを感じてきたアイコ。映画になると決まったときや週刊誌に映画監督と路上キスで載った同い年ですごく綺麗な女優に感じた「葛藤」や、ミュウ先輩のやけどを機に周りの人への計らいにも気づき、人として成長していきます。

自分で自分に作らざるを得なかった殻を破りたいと思っていたタイミングで、映画監督と不器用な恋愛（擬似恋愛かも）をし、映画監督がバリバリっときれいに破ってくれました。アザなど生まれつきで自分ではどうしようもないことを世間は奇異な目で凝視し薄っぺらな同情心で可哀想と言ひ、近寄らず疎外感を植えつけ孤独感を味わわせてしまいます。その世間を私もつくっているのです。自覚しなくちゃ。

さあアイコさん、次の恋がはじまりますよ。「あなたはあなた」原田君と二人で何を感じ、何を楽しみ、何に苦しみ、何を考え、お互いの心の中に何をシェアしていくか、ドキドキわくわくしますね。(S)

主人公のアイコは、顔にアザがある。

雑誌に写真がのり、映画監督とも出会う。

恋愛を監督としていくのだが、どうも飛坂監督は映画の材料としてのアイコを見ているのが半分以上で、やがて消えていく。

私は主人公が、出会いの中でさらに成長してうれしかったです。

恋愛をした時の、不安やときめきを味わうことができました。

映画の発表の時の女優たちの美しい世界と、アイコの日常の思いが対照的で、フラッシュ映像を思い出さされる。

片思いではなく、片想いという題が本当にふさわしいと感じた。(TK)

◆ 5月課題本 ◆
『半島へ』
稲葉 真弓/著 講談社

始まりは「立夏」。5月の例会で読むのにぴったりとあてはまる課題本になった。

先ず、アカテガニという赤い色彩が登場して、それから緑色の山野につづく自然描写は、頭の中をフルカラーのモードに立ち上げる。身の回りに置かれた木製の馴染んだ道具類が沈んだ色でアクセントをつけるようだ。

半島とは、三重県の志摩半島をさしている。

〈東京って、最高〉といっておよそ30年東京暮らしをした女ひとり、猫を相棒にして〈太古から生き延びた土地〉に別荘を建てた。

水を吸うモチノキ 数ヶ月の命しかない働きバチ 空っぽの山繭 青い風 朝の薄い霧 青白い煙 少し銀色を帯び甘くて涼しいにおい 「サ行」の魔術みたいな音 野放しなのに生臭くないエロチックな香り シェルターの化身となる森 二十四節気の暦 月齢の暦 潮汐表。

それらを並べただけで野や山、海の気が満ちた半島の家が見えてくる。

次々と現れる森や林のひっそりとしたたたずまいに、読み手の肩の力が抜け、読む速度が遅くなる。書き手の呼吸に合わせて楽に進んでいる。

沼の水生植物の中に小舟が忽然と姿を現すと、自分だけの「舟の来歴」を転がして手足のあるぼろぼろの舟の物語にして楽しむのも、詩人である作者の感覚が息づいている。海から上がってくるものとして、牡蠣に手足をつけて想像をたのしむ主人公だから、舟に手足をつけても不思議はない。

近隣の住人は適度に距離を保ち、心身共に越境してくる様子がない。

〈野は野菜と果物だらけ。岸壁のいたるところに牡蠣。アサリも海草も魚もひしめいている。野で暮らすのだ。海に入るのだ。なんて贅沢な老後だろう。〉

主人公のつぶやきそのままに、こういう種類の贅沢もあるだろうと想像すると、その中に浸ってますます読む速度が遅くなる。

〈植物の生育は、ひとの思いの届かないところにある〉と思いながらも、殺虫剤を買い込んで植物や動物と闘う女ひとり。生活の中心にあるのは四季、それも二十四気節。数えたら

いったいどのくらいの動植物の名前が作品に顔を出したのか。名前を知らないで共存している命の多さは、想像もできない。

東京で暮らしていたとき格闘した相手は、なまはげみたいに立ちはだかってくる消費社会。それは 廃棄物に象徴される。安らかな半島の森や林の中にも、廃棄物が進入してくる。人間とは異質なものの如く存在するが、命に満ちあふれている半島の現実の後ろ側にあるもう一つの現実として顔を出している。廃棄物は、人の安楽な暮らしのために働いた残体なのだから。

例会の会話の中でも、光には陰の部分があるという話題にもなった。半島が光とすれば、(著者には『志摩 ひかりへの旅』という詩集がある)草取りや、にがての生きものとの鉢合わせ、そして、なにより、その暮らしを自分の身で支えていく体力気力の賄いが陰の部分となる。現実生活の厳しさが、読み手の生身の経験として捨てきれない。

〈この世の主人は誰だろう。〉

〈本当のふるさとはどこだろう。〉

岩と海と真っ青な空の半島の小さな誰も居ない浜で、〈未分化のままで、ミジンコのように浮かんでいた遠い記憶〉に思いを馳せながら、主人公は自らに問いかける

彼女が大切に思うこの自由、この浮力を、読み手として共に味わいながら、次第に主人公の足下に吹く風が感じられる。すばらしい自然に恵まれた半島の生活だろうけれど、いつまでもどっぷりと浸かっては居られない。

作者が、志摩半島と東京を行き来する生活を始めたのは45歳ころらしい。そしてこの作品を書き下ろしたのは60歳過ぎのことだ。ここに書かれたのはおよそ1年分の情景だが、その時間は砂のようにこぼれて〈無限の場所〉に近づいていく。主人公は、老いていく自分を見ている。読み手も、一緒に座り込んで堪能していた半島の自然だったが、移動する主人公と共に腰を上げる気分だ。

終の「ふるさと」はどこなのか。

どこなのかと尋ねつつ〈無限の場所〉なのだと示している。

「無限」には時や空間の限定がない。つまり「将来」という言葉も「東京や志摩半島」という言葉も相応しくない。とすれば、「連続するいま・ここ」が結び続ける縁を「ふるさと」と言うしかないでしょう、と作者と語ってみたい。

作者は、この後64歳で、東京の病院に入り、膵臓癌でベッドから去った。

彼女の〈遠い記憶〉から引き継いだ〈縁の小車〉は、まわり続けているだろう。

志摩半島はたしかに美しい光景が広がる。今回も、作者の資料だけではなく地図や観光雑誌まで竹原図書館に用意してもらえたので、半島を紙上で眺める事ができた。そこに、どれほどたくさんの命の営みがあることかと、これまで観光案内の雑誌で見ることのできなかった命を感じたのは、この作品の描写のおかげである。

講師 吉川 五百枝

◆ 三行感想 ～ 会を閉じて忘れぬうちに ～

- ❖ 題名の『半島へ』の「へ」と言う助詞の使い方に注目。内容はとても単純、穏やか、読後感としては爽やか。でも筆者の今後や身の始末の仕方を考えさせられます。自然感溢れる実感できる部分の多い小説ですよ。(K)
- ❖ いなかで暮らしたいなら、こういう生活ができると読むだけで体験できたような気がする。人間が動物や植物を世話するように創られたと聖書の創世記に書いてある。アダムとエバのエデンの園を思い出した。永遠に生きて楽しめるという将来、神の約束をまちたい。(TK)
- ❖ 「半島」という文字から日本以外の半島を思った人が他にもいらしたことが面白かった。半島へ向かう主人公は暗い生活から明るい場所へ来て、重くのしかかった肩が徐々に軽くなっていく生活をおくれる場所を見つけた。地図片手に行ってみたいなと思わせる、なんと素敵な半島なのかと興味を持って読みました。(N2)
- ❖ 私は人生の終り方のヒントを頂きました。暦は人生の水先案内人 天体のサイクルの中で自然と一体化して生き死す。体験が宝物になりそう。(苦・楽共)(M)
- ❖ 何かに傷ついて、東京の生活から逃避し、半島と行き来する人生を選んだのだろうと思った。会の参加者は、こんな生活は長期間は、出来るものではないという話が主婦の目線でおもしろかった。

「帰るところがあるからこそ 現実の世界が楽しめる」
「苦しいこと、しんどいことは開放される時が必要」半島への生活はそのひとつかもしれない。(Y)
- ❖ 東京から志摩半島のある入江に移り住みそこに住む人との交流を楽しみ、海や森からの溢れんばかりの自然の恵みを享受して暮らす。一年弱が過ぎ再びここに戻る気持ちをどこかに残し乍らひとまず荷物をたたみ東京に帰ってゆくのだが。(YA)
- ❖ 初めて参加しました。ここ何年も本を読んでいません。少しずつでも読む習慣をつけたいと思い参加しました。『半島へ』さらっと読みましたが、今日の話聞きもう少し深く読まないといけないなと思いました。(MY)
- ❖ 志摩半島での1年弱の暮らしが二十四節気にそって描かれた物語。年取っての東京から半島への移住は体力も気力も必要で大変であろうと思った。(KT)

『半島へ』を読んで

半島とは三重県の志摩半島のことなのですね。

題を見た時、思ったのは朝鮮半島の話かと思いました。竹原の海、山ありの場所。私の住んでいる所に似ているので、納得出来ることたくさんありました。アカテガニの話、私も竹原に来て大潮の日、夜、アカテガニの産卵を見て感動しました。

テレビ局が来て、それを写し放映しましたので、見た人もいるのではないのでしょうか。竹の子、はちみつの話、自然染めのこと、真珠の養殖はありませんが、ハチの干潟には、ワカメ、ヒジキ、ノリ、カキと自然の海の恵みの品、たくさんあります。

農家の人は今の暦より、二十四節気を使用します。私はよく手紙を書きますが、友人からいつも教えられる事です。月も昔のよびかたで書いてきます。

この人は東京のめまぐるしい生活から離れて、自然にかこまれて自分の思う様にくらして、今はめずらしく子供が玩具で楽しく遊んでいる様です。どんな所でも十もあれば一もあります。自分に合う場所でも永い間住んでいれば変わります。自然も自分も。

私はどこで死ぬのか、どんな形で最後を迎えるのか、ここと決めた場所は、はたして現れるのか、きっと死ぬまで同じことを思いながら生きていくのだろう。

自分が思うようにはなりませんからね、人生は。(M子)

ずっと東京で生きると思っていた、独身女性の〈私〉が、あるとき、志摩半島に家を建てる。崖と海と森のある暮らし。息抜きがてら通っていたが、しばらく暮らしてみることにする。二十四節気に沿った、春から夏、秋、冬の田舎暮らし。はちみつや筍、旬の野菜のお裾分け。蛍、静かな時間。虫や雑草たちとの格闘。森の恵み、海水浴。同じような移住者との交流。空気も景色もゆっくりと、でも確実に変化していく、それを感じる喜び。私は〈私〉とは逆に、瀬戸内海の島から東京に引っ越したが、〈私〉の喜びや、戸惑いがよくわかるような気がした。豊かさとは何か、贅沢とは何か、幸せとは何か。〈私〉が経験し、感じる一つ一つを、私はとても懐かしく、少し淋しい気持ちで読んだ。

「どこでもいい、逃げ出す場所が欲しかった」と、〈私〉は言う。

半島の家に住み始めた頃は、確かにそこは東京からの逃げ場所で、ひとときの休息だったのだろう。しかししばらく半島の家で暮らすことを決心した時、何もかも置いてきたつもりだった〈私〉は、すべてを担いでやってきていた。迷いも、悲しみも、戸惑いも。そして一見無関係のような自然の中にも、都会とそう変わらない、悲しみや得体の知れない不気味さがあることを知る。

「赤い咽喉が落ちている」、藪椿のシーンがとても印象深い。森を歩いていて、おびただしい量の藪椿が道いっぱいに無数の花を散らせていたのだ。近づきがたい、藪椿の墓地。森は生を育むが、また死も内包している。

「早く、早く。でないと間に合わなくなるものがある」。

何が間に合わなくなるのだろうか。〈私〉は何を焦っているのだろうか。老いを目前にし、どこを死に場所にするかということか。どこを自分の居場所として作り上げ、〈シェルター〉にするのかということか。問題は、どこに住むのかではなく、〈私〉がこれからどう生きるかということなのだろう。

「早く、早く。でないと間に合わなくなるものがある」。

一日一日と、死に向かって私たちは生きている。読んでいる私自身も問われている。そんな〈私〉達の焦りを飲み込むかのように、森はそこにただ〈ある〉のだろうと思う。(C)

東京に生活拠点を置く主人公は一年弱の期間を志摩半島のある入江で過ごす。季節の移ろいを感じられる自然豊かな森と海からの恵みと共にそこに暮らす人たちとの交流がいきいきと描かれている。森ではいろいろな生き物たちが楽しませてくれ、植物は季節の移ろいを教えてくれる。池だった場所に残る船の残骸等の気味の悪い姿。森の様子が目に浮かぶ。移住者が多いそこに暮らす人たちの個性的な生活や生き方。何の大きな事件が起こるでも無い半島での生活。何が一年間も主人公をひき留めたのだろうか。母親と住む為に、一応引揚げてゆくが、果して又都会から志摩半島に戻って来るだろうか。(YA)

題名は『半島へ』。半島は朝鮮半島かしら。「へ」となっているから作者の意志の強さと情熱の深さを感じるなあと思いつつ、読み始めると三重県の志摩半島だと分かり一人苦笑しました。

さて読み進めると、作者が志摩半島の自然（草下の地層、森に棲息する動物、生える植物、星空など）を光や空と一体となりながら見つめ、葉擦れのかすかな音さえも聴きもらさず、森の繊細で微妙な匂いを嗅ぎ取り、森や海の豊かな匂いを味わい、目に見えない気配さえも体中の肌で感じるという瑞々しい感受性でとらえていることに感服しました。

また登場人物「私」が二十四節気に沿って多様で豊富な知識に基づいた生活を送っていることに、読者は一種の憧れを抱きながら、小気味よく読み深めていくことができました。

「私」は蚊取り線香の煙にむせながらも年老いた母と珍しいヒメホテル見学をしたり、満天の星空に吸い込まれていく「現実と非現実の境がなくなる」あの感覚に酔いしれたりしながら、至福の時を感じているだろうなと読者としても嬉しくなりました。

さらに半島で出会った養蜂家の越智さん夫婦、自然染めの橘さん夫婦などと程よい距離で付き合っていることも理想的です。だから一見気味悪く感じる白骨事件の噂話（息子の溺死、病死の夫、死に場所を求めた妻）にも何故か本当だったのではないかと錯覚してしまいました。

最後、東京での生活を完全に終わらせるために東京へ行こうとする「私」。読者は思わず次回作を期待してしまいました。

ところが読書会に臨みこの作品の読後の心地よさは、裏側に作者の“闇”があってそれを敢えて書いていないだけではないかということを知りました。「私」は東京での生活（男との別れ、親友の死）に傷つき疲れ心に“闇”を抱いて、志摩半島を目指して来ています。

「私」にとって森は“女たちの隠れ家”であり、孤独をなだめるために、“自然と共に在る暮らし”を営むことで自然の優しさに癒されたいと願った場所なのではないでしょうか。読者はいっそう「私」の“闇”への想いを深くするのです。（S）

最近、里山ブーム、古民家カフェ、田舎への移住が盛んである。

いくら良いと思っても、かなりの決断が必要だ。

古い家の改装、近所づきあい、現金収入の確保など考えると、不安と重荷でいっぱいになる。

私の場合、害虫とか、治安を考えると、やはり街の団地が良いと思ってしまう。だのに休日になると、田舎のカフェに行きたくなり、それらの人々を尊敬したくなる。

実際にそんな生活をするとうなるのか、体験させてもらえるのがこの本となる。

自然の中で人間がふれあえる感性をあるべきものとして認識しました。人間は、普段からふれあっているものから影響や刺激をうけて、いろいろな品性が開発されていくものですが、各自が何を選ぶか決めなければなりません。自然は人間の基本のようでふれあっていない街の日々。公園にいろいろな花をうえて、味わえるおゆになればいいとつくづく感じます。（TK）

◆ 6月課題本 ◆

『私はマララ』

マララ・ユスフザイ/著 学研パブリッシング

パキスタンに生まれた「マララ」という少女にピントを絞り、視界の中心点に置いて追って行く。何を、どのように主張し、どんな暮らしをしていたか、と、マララから目を離さないまま、本人のマララと共同執筆者が書き上げた一冊。

マララの祖父から父へつながれたもの。

厳しく気むずかしい祖父は、言葉を大切にした。祖父から父への大切な贈り物は、教育だった。公立の高校に行かせて英語を学ばせ、現代的な教育を受けさせた。知識を身につけることの楽しさ、人間のさまざまな権利を踏みこじってはいけないということも、父に贈られたものだ。

父から私マララへつながったもの。

祖父を喜ばせたくて吃音を克服した父。読書家であり、学校を作ることが夢だった。知識ほど貴重なものはないと主張し、教育を受けられない人がたくさんいることが多くの問題の根底にある、というのが父の意見だ。ブット首相（イスラム世界初の女性首相）が誕生しても、パキスタンの何百万人もの女の子が学校に行けない。

父の学校経営の苦労は続く。やがてタリバンによって学校は閉鎖され、爆破されるようになった。マララは 父と共に外国のメディアへ破壊の現状を訴え、破壊されたのは建物だけではなく、西洋の知識や技術を吸収する望みも破壊されたのだと訴えた。マララは、戦争をする世界を変えるために教育が必要だという考え方を父と共有する。

母から私マララへつながったもの。

母は、女性が男の付き添いなしにでかけるのはよくないというイスラム文化の中で、6歳になると学校へ入学。クラスに女の子は母一人だけで、学校生活は1年保たなかった。父と知り合ったとき後悔したが文字が読めないままだ。平和や教育を求めて活動する夫やマララを応援し続けた。

私はマララ

パキスタンの美しいスワート渓谷を、ふるさととする。作品中では、村の細かな描写が続いて、その美しさが語られる。

4歳の2001年9月、イスラム過激派のテロによりニューヨークのビルが崩壊。その行為が、対立する世界情勢を明るみに出した。

〈「マララは、どうして顔を出してるんだ？」私はブルカなんか着たくなかった。〉

〈コーランには「人を殺してはならない」と書いてある。しかし、タリバンは、音楽、仏像など芸術と文化と歴史を奪った。〉一口に「イスラム教徒」と束ねられない混乱がみてとれる。ベナジル・ブットが殺された日〈「私も、女性の権利のために闘わなければ」〉とマララは思っている。

恐怖のタリバン。インタビューに応じて考えを公表したくても、タリバンとタリバンを恐れる家族の許しがなくて話せないパキスタン国内。だが、11歳のマララは、恐れることなく〈「タリバンはペンや教科書を奪うことはできても、考える力を奪うことはできない」〉と話した。

正体がわからないものがタリバンを支援している。状況が複雑すぎてわけがわからなくなっている多くの人々は、それぞれが疑心暗鬼となり、暴力や強権力にひきずられている状態が記される。父は、恐怖は人間を残酷にすると言う。

野蛮な公開裁判や公開処刑が行われ、いつも恐怖と隣り合わせであり、和平協定下で、タリバンはますます凶暴化する。2009年、一家は国内避難民になって故郷のスワートを離れざるを得なかった。

〈頭に何もかぶらないだけで モダンになれるわけではない。〉

タリバンの命令に背いて、こっそり学校に通った事もある。どこでも教育の必要性を声高に話した。問題だらけのパキスタンなのに、それを解決しようとする政治家がいない。マララは政治家になろうと夢見た。

〈私がしたのは、意見をはっきり口にしたこと。〉

声を上げ続ける人間を狙い始めたタリバンは、2012年15歳になったマララを「教育を宗教から切り離そうとしたアメリカを崇拝する西洋かぶれの女」として、下校途中に襲撃した。頭を撃たれイギリスの病院に送られたマララは、奇跡と言われる手術を乗り越え、2013年国際子ども平和賞受賞、2014年ノーベル平和賞などを受賞した。

〈私が父に活動させられたのだという人も居る。活動は、私の意思なのに〉。こうして“タリバンに撃たれた少女”は“教育のために闘う少女”に成長し、発信し続けている。

読み終わって、マララへ固定していた焦点をはずすと、いくつもの事象や疑問が押し寄せてくる。今回の読書会は、そこから始まったとも言える。スワート渓谷はどんなところか、パキスタン・アフガニスタンという国の成り立ち、ヨーロッパ・アメリカ・ロシア（ソ連時代から）の影響、イスラム教の性質、タリバンを始めイスラム過激派の存在。そして、パキスタンで無人航空機から爆撃を受けた「ナビラ」という少女。彼女も戦争を回避するためには教育が必要だと主張している。

一冊の本からの広がりがあるので、今回は、図表や写真を使ったMさんのレポートにみんなの語り合いが助けられた。図書館からも資料提供があった。日々動いているイスラム圏

のニュースに接するとき、多様な視点が必要だと感じる。マララやナビラが、教育の大切さを述べているのも、こうした視界の広がりを得て考えようということだろう。

〈イスラム教は、平和と人道と同胞愛を重んじる〉。マララの信じるイスラム教は、このよ
うなものだと述べている。異なる文化や価値観どうしが、どうおりあいをつけていくのか、
そこで自分は何ができるのか。

中学校のカリキュラムの一つとして「職場体験」があり、図書館体験としてこの読書会に
参加した4人の中学生に、戦争について考える何かを聞きとってもらえただろうか。

講師 吉川 五百枝

◆ 三行感想 ～ 会を閉じて忘れぬうちに ～

- ❖ 戦争によって多くの人々が亡くなっていることを聞いておどろきました。戦争をこの世界からなくしいきたいと思いました。(T)
- ❖ 命がねられるかもしれないという中でもしっかりと自分の意見を主張しつづけているマララさんの勇気におどろきました。(R)
- ❖ 私たちはあたりまえに勉強をしています。でも、マララさんやナビラさんのように勉強がしたくてもできない人がいることにびっくりしました。この話を聞いてから勉強ができるありがたみに気づきました。(A・N)
- ❖ 命が狙われるかもしれないという状況でも、圧力に屈せず、訴え続けるのは、すごいな、と思いました。(M)
- ❖ 彼女の意識の高さには感服します。ノーベル平和賞を受賞した少女だけにとどめてはいけません。彼女の背景を知ることがとても大切と思いました。並行してナビラ・レフマンも読んでください。お腹にも、心にもズシ！！とくる本です。おすすめ本です。(K)
- ❖ 2年前、最年少17歳でノーベル平和賞を受ける。又パキスタンに生れ、又想像を絶する過酷な生活環境の中で子供、とりわけ女の子の教育の内容性を訴える。何故教育が必要なのか、又反対に教育が誰にとって都合の悪いものなのか。(YA)
- ❖ 私達の全く知らない世界で貧困と戦争。世界を巻き込んでいる。マララさんは命をかけた第二の人生で頑張っている。味方の人々のなかでもマララさんにいるんな意見を言っている。どんな状況でも自分のブレない主張ができるマララは強く素晴らしい人だと思う。(TK)
- ❖ 『わたしはマララ』一冊の本の背後にある歴史、宗教、大国の影響等々を、改めて読んで

みたいと思いつつ、きっととても複雑だろうとつくづく感じました。(N2)

- ❖ この本に出会ったことで、アフガニスタン・パキスタンの歴史を学ばせてもらいました。「教育」の大切さを改めて感じました。日本の未来は……？ 私たちにできることをやりたいと思いました。(E子)
- ❖ 欧米文化と米文化と経済がイスラム圏に圧力をかけた為、色々まさが起こってくる。歴史が大きく動くとき、しばらく様子を見れば女性も権利がやってくると思うが、時間と労働力がある。(M)
- ❖ 6/21 の読書会でマララ・ユスフザイさんが生まれたパキスタンの北部山岳地帯のスイート渓谷の写真に出会うことが出来た。美しい山岳地帯だった。心を動かされる風景にマララの芯の強さを見るような気がした。『わたしはマララ』読書から様々な歴史や文化・宗教・人間模様を学習することが出来た。ほんの少しだが「知らないことを学ぶ」ことから、今の自分を振り返り、自分にできること、次のステップとしての「知らないことを学ぶ」体験を少しでもしていき、自分はどうか、何をしたいかを探れるようになりたいと思った。(R子)
- ❖ 『わたしはマララ』著者紹介を読みました。これだけで『わたしはマララ』の本を読んだような気がしましたが、先生の話聞き、アフガニスタン、パキスタンの歴史とか、どうしてうたれたのか、又シリアの情勢とか考えないといけないことに気が付きました。(M・Y)
- ❖ まず、「わたしはマララ」プチ調べに驚いた。パキスタンの歴史が少しわかった気がした。次にマララさんとナビラさんに関しては「対テロ戦争」の犠牲者という点では同じなのに加害者がちがうだけで二人の少女のあつかいが違うという事もわかった。つくづく日本人は幸せだと思った。(KT)

『わたしはマララ』を読んで

ノーベル賞受賞後の講演で世界に向けて子供たちの教育の大切さ、必要性を訴えるマララさんの姿は多くの人に感動を与えた。パキスタンでタリバン等の脅威が包囲する厳しい環境にあっても父親の感化や教育を受けたお蔭で一本のペンの力で社会の歪みを世界に知らせ訴えることが出来た。タリバンに襲撃され九死に一生を得たにも拘らず、なお子供たちに一本の鉛筆の必要性を訴える彼女の強い姿は最早一人の少女の姿ではなく世界中の賛同となっている。何故教育が人にとって必要なのか、反対に誰にとって教育は都合が悪いのか。

(YA)

課題本は『わたしはマララ』。出版された2013年に1度読んでいたので、今回で2度目でした。体中に鳥肌が立ちました。

マララさんの凄まじい生き様や貫いた信念の強さから、世界中が感動で震えました。

- (1) 死の恐怖との闘いの中で、ひるまず登校したこと（襲撃前）
- (2) 死の恐怖との闘いの中で、襲撃後も自分の信念を貫いたこと
- (3) 死の恐怖との闘いの中で、世界中に女子教育を訴えていること
- (4) 死の恐怖との闘いの中で、家族や仲間を信じ抜いたこと
- (5) 死の恐怖との闘いの中で、襲撃したタリバンを許していること

彼女は、アフガニスタンやインド等の周辺諸国との状況の中でパキスタンがおかれた歴史的、地理的、政治的背景を客観的に見事分析し、自らの考えを主張し平和の尊さを訴え続けています。誇り高きパシュトゥン人として、自分がこの世に生まれてきた使命を全うしようとする姿にさえ見えます。

彼女のお陰で世界中が知ったことは多々あります。

- (1) 学校へ行けない女子が世界中で6600万人もいるという現実
- (2) 経済的理由や設備環境の悪さで、続けられないという現実
- (3) 貧困や無教育でタリバンやISに加入してしまうという現実
- (4) 教育こそが平和な世の中を築くきっかけになるという現実
- (5) 学ぶことは、生まれてきた喜びを実感させてくれるという現実

一方、日本に住む私にできることは何かと考えたとき一ヶ月間「無力感」にさいなまれました。でも気付いたのです。「限りなく無力に近い微力だけど、無力ではない」と。所属するボランティア会で、両国に絵本を送る活動に参加しようと決心しました。

マララさん、ナビラさん、アフガニスタンのマリウムさん、それぞれの地で、自分の夢をどこまでも追い続けてください。世界中で応援しています。(S)

マララさんのことは、有名でしたけど、本人からの話をきけてよかったと思いました。銃でうたれた時のことや、治療がリアルにきけて、又、本人の平和や勉強したい女の人への権利の主張を強くもっておられるその熱意は並のものではないと思った。

勇気やねばり強さ、忍耐、自制がある。恐怖や自然災害、貧しさ、そして貧しさの中での人間関係を垣間見ることができる。ある人は、有利な方へまかれる人も。でも、マララの家族は、他の人に食物をもてなしたり、教育をうけるチャンスをたくさんの人にひらいてあげている。

今、ニュースでも、恐怖の中で過ごしている人がいると思うと心が痛くなる。彼女は星のような存在でした。(TK)

◆ 7月課題本 ◆

『スクラップ・アンド・ビルド』

羽田 圭介／著 文芸春秋

文学作品だとか、芥川賞受賞作だとかいわれても特別に構える必要はなく、まずは、ユーモアもあって筋も読みやすかったと話が始まった。しかし、さらっと読めても、異質感が残るのは何だろうという疑問を持ってしまった。

この作品には、若い世代として28歳の健斗、つきあっている亜美、健斗の友人大輔が居り、その上の世代として健斗の母、さらにその上の世代として87歳の祖父が登場する。健斗の父は彼が小2の時なくなっているし、祖母もすでにいない。

祖父に対する健斗の接し方を考えるのには、父と祖母が欠けている設定になっていることが大きい。この二人が居て一つの家族である場合は、各人の絡みは複雑になり、社会が語られる事になってこの紙数では終わらないだろう。

つまり、この作品は、老世代の福祉に問題意識をもつものの、社会や家族のあり方を考察する社会科学（図書分類で言えば300番台）の作品ではなく、900番台の文学作品であることを示している。

老人を文字でどう表現するかは、述べる人とその老人との距離によって変わる。

健斗は、祖父に対して、決して冷たい孫ではない。それどころか、自分は祖父に対して自己中心的ではなかったかと反省さえしている。だが、〈弱者へ手をさしのべてやっている満足に甘んずるばかりで、当の弱者の声など全然聞いていなかった〉という反省の中に、祖父を「弱者」とみている目がある。

〈苦痛や恐怖心さえない穏やかな死。究極の自発的尊厳死を追い求める老人の手助け〉をすすめる老人の理解者である自分。

〈自分が楽をしたいからなんでも手伝うのと、尊厳死をアシストするために葛藤を押し殺して手伝うのは全然違う〉という自分の葛藤の中身は、強者対弱者の意識そのものだ。

祖父の“尊厳死”という計画書が存在するかのような余裕すら感じる。

かまっていしがりやの祖父が示す際限ない甘えに対して、過剰な足し算の介護をして、祖父の“念願”通り、すべてを衰えさせて早く死なせてあげようという考えに彼はたどりついた。それが“尊厳死”だと思ったようだ。そうになると、〈老人福祉的なシステムは、老人

をただ生かすだけ)の仕組みということだから健斗の怒りの対象となる。早く衰えて死に至るように協力するのがやさしさだと思っている「やさしい」健斗を描く。

(姉たちによる何も考えていない優しさと形としては変わらないが、行動理念が違う。)苦痛なき死という欲求にそうべく手をさしのべる健斗は、真剣である。祖父の“尊厳死”へのモチベーションを下げてはならないのだ。

健斗の「やさしさ」は続く。

(苦しみに耐え抜いた先にも死しか待っていないのだから早く死にたいという切なる願いを想像し理解する)「やさしい」健斗。

(もっと生きて苦しめという体制派と徹底的に闘うという)決心をする「やさしい」健斗。

しかし、死への計画書があるわけがない。祖父の願望が、健斗の考えた“尊厳死”ではなかったという事実が、物語の終わりに近いほんの2行で描かれる。

お風呂で溺死しかけた祖父を引っ張り上げた健斗に、祖父は

「ありがとう。健斗が助けてくれた」

「死ぬとこだった」> と言うのだ。

どうあっても生きたいという生ある者の“尊厳”なのではないかと読んだ。

(苦しみながらももっと長生きさせられる地獄を味わうだろう。)健斗は祖父の先行きをそう見るが、行き先に(地獄を見る)のは、老と限ったことではなくどこでも誰にでもおきることで、それが本当に地獄なのかどうかは他人の評価することとは思えない。

祖父を回転軸として、健斗という青年(28歳でも青年の匂いがする)が、人は老いていくという現実と、迎えなければならない死も容易くはないと知るメリーゴーランドに乗っている姿を想像した。高くなったり低くなったりして祖父を中心に回っている内に、健斗自身が、人が生きていくのは計算式に依っているのではなく、どうあろうと自分の中に蓄えた力で、ただ闘っていくしかないのだと思うようになった姿を、最後の1ページに書いて物語は終わる。

この『スクラップ・アンド・ビルド』というタイトルに何を思うのか。

たまたま少し前の夜、テレビをつけたら『シン・ゴジラ』の最終場面をしていた。

林立するビルをなぎ倒したゴジラの最期の姿が映っていた。その時、画面から男性の声で「スクラップ・アンド・ビルドでこの国はたちなおってきた」というセリフが聞こえた。偶然聞くことになってびっくりしたのだが、これから生きていく人々への期待をこめたよびかけとして伝わってきた。

「スクラップ・アンド・ビルド」というのは、日常では経済面での話の中で聞く。だいたい無機質な使われ方だと思っているから、人が老いるという有機的な内容にこの題がつけられていることも、もともと気になっていた。混ざり合わないものを感じていたのだ。

この粗いミキシングがこの作品の象徴的な色合いではないのかと思いはじめた。

「シン・ゴジラ」のセリフは、日本語で言えば「やりなおす」というニュアンスに受け取られる。そういえば健斗が入社試験に落ちたとき、担当者から、「28歳だ。まだまだやりなお

せる」と励まされる場面があった。思わずうなずきたくなる言葉だが、私は、人生はやりなおすような質のものではないと思っているので、オヤッと取り出した破片だ。

間もなく8月6日が来る。健斗の祖父にも戦時体験があると書かれているが、私の出会う
老いた人は、72年経とうとも、あの日々の両親やおじさんお婆さんのことを涙を流して話される。人は過去のやりなおしができるのか。若くても年とっていても、やって来る新しい一日一日を夢中で生きているだけのお互いではないか。人の生にスクラップ・アンド・ビルドは無いと思う。

みんなでワイワイ語り合ったが、作家本人は合理的に片付けて、もう別のところを見ているかもしれない。

講師 吉川 五百枝

◆ 三行感想 ～ 会を閉じて忘れぬうちに ～

- ❖ 現代作家の本領発揮、さらっと読めますよ。文章も難解なものではなく…でも奥は深いですよ、流石芥川賞。(K)
- ❖ 主人公はおじいちゃんの介護をしている。弱者の老人が早く死ねばいいと思っている。社会問題として読んだがよい家族になれたらいいと思う。(TK)
- ❖ 最後のページの「…どちらにふりきることもできない辛い状況のなかでも、闘い続けるしかないのだ。」が『スクラップ・アンド・ビルド』の結論であろう。作者の羽田氏の中にある現代の若者像を見たように思えます。(E子)
- ❖ 健斗とじいちゃんと娘である母親との関係。積極的介護で死に致らしめ、消極的介護で長生きする為の体力をつけさせる。という事は通常言われている優しさ親切と真反対で面白い発見でした。(N2)
- ❖ 芥川賞発表の時にすぐ読んだ時には、サラッと読んでしまったが読書会で読むうちまったく感想が変わった。『スクラップ・アンド・ビルド』とは『一日一日戦い続ける』ということだと教えて頂いた。健斗は、死を待つだけのように見えるおじいちゃんとの関わりの中で、少なくとも今の自分には闘い続ける力が備わっているということを教えられた(Y)
- ❖ 要介護の祖父と孫との生と死に対する毎日の闘いが描かれた作品。その中に“母”という存在も加わり母と祖父の会話は“自立”を促すものだと思う。一見ひどいものだが内容としては、よくあることだし、祖父にとっては、何でもやってあげる介護は本人の生きようとする力をダメにすることもある。しかし、私は嫁という立場では“自立”という目だけでは介護できないことも多い。日々、介護していきながら介護の中で自分に問い返していくチャンスを与えられ、結局は自分を変えていってくれていることに気付かさ

れた。この本は自分の心の中を見られているという思いをもつ本でもあった。(R子)

- ❖ 表面的な生きることと否定的な祖父を現在二十八歳の無職の孫健斗との毎日の生活のやりとりの中、段々と2人の内に変化の兆しが見られるようになるのだが、しかし最後は先生の健斗像を聞いて、思いもしなかった彼の姿に深く考えを揺らした。(YO)
- ❖ スクラップ・アンド・ビルドの題名をどうしても理解できませんでしたが、AIのような計画的文章構成だったかもと。頭の中の混乱が整理できませんでした。文学の分類学も考えませんでした。この会は深いです。(M)

『スクラップ・アンド・ビルド』を読んで

7ヶ月前に5年勤めた会社を辞めた、28歳の健斗。

「じいちゃんなんか、早う死んだらよか」。そう繰り返す言う87歳の祖父(じいちゃん)と、母親と同居している。孫の健斗はその願いを叶えるべく、じいちゃんが苦しまず、穏やかに死ぬよう、徐々に体が弱っていくように過剰な介護をしていく。健斗は思う。「八十七年も生きてきた祖父の終末期の切実な挑戦に協力できるのは自分くらいしかないだろう」と。

弱く、死にたがっているじいちゃん。健斗はそう思っていた。

しかし読み進むと、このじいちゃんはとてもしたたかな人物だという影がちらほらと垣間見えてくる。確かに体は弱っているけれども、戦争を越えて生き残り、5人の子供を養い、老いて子供たちの間をたらい回しされて暮らしていても、ほとんど呆けることなく、生き抜いているのだ。相手や状況によってやり方を使い分けるといって、生き抜く知恵も力も持っている。そうでなければ、87歳までひょうひょうと生きていたことはないだろう。

そして実は健斗の方が弱いのだということが徐々にわかっていく。会社を辞めたが、その後何社受けても採用されず、お金もない。まるで社会に必要とされていない、無力な自分を感じている。社会的弱者になろうとしている。

よぼよぼのじいちゃんに勝てるのは、実は若さだけなのだ。若いというだけで、強さはある。一瞬のみなぎるパワーは強い。しかし若さ故の強さは、実は脆さも危うさも内包している。

その脆さを、じいちゃんはわかっていた。

「じいちゃんが死んだらどげんするとね」

そう言われて、健斗は初めて気がつく。肉体的に弱々しい、社会に必要とされていない、じいちゃんという存在が、今の自分を支えていたのだと。

健斗のひたむきさは、真剣故に滑稽にも感じられる。なかなか安楽死の流れに乗ってこないじいちゃんに対して、「苦痛のない死を、自分の意志でつかみ取ってくれ。自らの無謀な夢

をかなえるための正しい資質が、祖父には必ずある」などと願ったり。健斗はいわゆるどこにでもいる普通の人だと思う。ちょっと前に仕事を辞めた、28歳の無職の男。実家暮らしで就職活動中。でもその普通さが、読んでみると何だか怖いように思える。思いやりのある健斗はじいちゃんを理解しているつもりだったが、全く理解していなかった。俺だけはわかっているという傲慢さのもと、自分よがりの考えとは全く思わず、疑うこともない。(最後の方では気がついたが)

そして、これは健斗に限ったことではないと思う。

一見常識的な、相手のことを思って発言したようなその考え方が、一步間違えれば、一步進んでしまったら、それは凶器になりえるのだということの、無自覚さ。この物語の先に、何だか私は、やまゆり園の事件が透けて見える気がして、ゾッとしてしまう。

相手のことなんてわからない、だから考えないと思考停止するのではなく。わかってないかもしれないと思える、心のゆとりのようなもの、常に疑うことのできる余白を自分の中に持つこと。

わかっていないかもしれないという、謙虚さを忘れないこと。

読了後、そんなことを再度自分に言い聞かせた。(C)

スクラップ・アンド・ビルド 古くなった設備を廃棄し、新しい設備を設けること。行政機構を新設する場合、同等の既存の機構を廃止し、機構全体の膨張を抑制すること。「一方式」

若い作家が、今社会の人達に関心を持っている高齢社会の医療福祉サービス法律保険の事を折り込み、孫の眼を通して人間の生き方を老後の事を考えさせられる物語です。若い健斗の生活、彼女亜美との関係、会えばラブホテル、あれには閉口ですが、今頃の若者は普通の行動なのでしょうか。

患者を薬漬けにして弱らせる病院へとか中年女性看護師に猫なで声で呼ばれとか、入院をさせようにも、介護関係の診察報酬が下げられた今は簡単に入院などできないし、できてもすぐ家に帰される。薬漬けのねたきりで心身をゆっくり衰弱させた末の死をプロに頼むこともできないのだ。後期高齢者の介護生活に焦点を絞った場合、おそらく嫁姑間より実の親子の方がよほど険悪な仲になるのではないか。手をさしのべず根気強く見守る介護は手をさしのべる介護よりよほど消耗する。子供を育てるのに似てる根気のいることです。

あらゆることが不安だが少なくとも今の自分には白い地獄の中で闘い続ける力が備わっている。先人がそれを教えてくれた。

健斗は祖父の介護を通して強い心をもらった。(M子)

課題本は『スクラップ・アンド・ビルド』。

「スクラップ・アンド・ビルド」は工業や行政の業界で、効率化を求めて再構築する用語。それを小説で使うなんてと興味深く読み始めました。

◆作品の魅力は

登場人物の設定がきっちり練られ、「あるある！」とリアル感満載なところ。途中で引っかかることなく、本を閉じた後「あれ？」と考えさせられました。スクラップ&ビルドしたのは何だろうと。作品中「どちらに振り切ることもできない辛い状況の中でも、闘い続けるしかない」と健斗は先人（祖父）から教えてもらったとあります。しかし作者は、若者であろうと年齢を重ねた老人であろうと死ぬまでどうにかして生き続けなければならないのではないかと訴えたかったのではないかと考えます。以前篠田節子さんの『長女たち』を読んだ際、吉川先生が「生きるのも死ぬのもままならず悪戦苦闘する」と表現された言葉を思い出しました。

◆小説の中で「スクラップ・アンド・ビルド」したのは

大きいのは「健斗と祖父の関係」ではないかと考えます。祖父は「早う死にたか」と事あるごとに言葉にします。でも深層では生への執着心を抱いています。そんな祖父を健斗は懐疑的な嫌悪感を持ちつつも、医療制度や介護システムの発達によって、「生かされている」祖父に対して悲哀を感じ、「自然で尊厳ある死」を迎えさせようと様々な見当違いなことをします。その姿は滑稽でもあります。しかし風呂場で溺れる出来事で二人は、自省や相手への想いを増し、茨城へと出発する健斗と東京に残る祖父の会話もこれまでと違ったものになっています。

◆吉川先生が尋ねられました。「あなたにとってのスクラップ・アンド・ビルドは？」

私にとっての「スクラップ・アンド・ビルド」は「一日一日を悪戦苦闘しながら生き続けること（周りの人とかかわりながら自分の想いも大切に）」だと考えます。でも、“生きる”ということはビルドの面が大きく、結果としてスクラップしていることも多々あり、無礼を重ねているなど自省している次第です。（S）

「スクラップ・アンド・ビルド」カタカナ語の辞典によりますと、企業の近代的な経営方針の1つ、老朽施設を廃して 能率的な施設を積極的に作っていくこと。この本とのつながりがよくわからなかったです。「芥川賞」受賞作品 高齢者の者（70才以上）にとっては、この青年のこの生き方について理解できないこともあります。老人介護については自分の事として、今後の自分の生き方について考えさせられました。（M・Y）

主人公健斗は、おじいちゃんの面倒をみながら早く死ねばいいとか 早く死ぬのを手伝ってあげていようとしている。最近の山ゆり園の事件を思い出す。弱者や役に立たない者は死

ぬ方がいいという。しかし私は自分は死にたくないのなら人に死ねばいいという考えは道理に反していると思う。しかしここであえて今の時代の生活や社会制度をあらわすためにオーバーに書いてあるようだ。自分も年をとるのだから、人ごとのように死ねばいいとか、お世話になった人をくそじじいというようなのしり方をするのは私にはできない。でも忙しさの中で世話をしてあげるのは葛藤がある。みんな闘っていると感じる小説でした。

(TK)

◆ 8月課題本 ◆

『忘れられた巨人』

カズオ・イシグロ／著 早川書房

様々な苦悩に耐えながら、長い年月を寄り添って生きてきた老夫婦（アクセルとベアトリス）が、息子を訪ねて旅をする物語。簡単に大筋を言ってしまうとこうなるが、村を追われた少年、戦士や騎士も道連れとなり、道具立てが大掛かりで複雑なものとなる。

老夫婦が旅する舞台はイギリスだが、今のイギリスという呼称ではなく、6000年前に、地殻変動でヨーロッパ大陸から離れた大ブリテン島だと言わなければ落ち着かない。

最初に住み着いた人々に対して、異なる生活文化を持つ人々が移住してくると、それはしばしば侵略と呼ばれる。そこでは両者の間で戦いが起きる。

大ブリテン島は、2000年前にはローマ帝国の属州となったが、ゲルマン民族の大移動に対処するためローマ帝国が撤退したあとは、ブリテン島の住人（ブリトン人）が暮らしていた。そこへ、5世紀頃大陸からゲルマンの一派サクソン人が移住してきた。

ブリテン島最古のケルト系ブリトン人は、この新しい侵入者に対抗して各地で戦ったのだが、その中で英雄として伝承されているブリトン人がアーサー王だ。

この歴史的な展開を知らなくても作品は読めるが、あれこれ想像しながら道具立ての妙を味わうには、少し知っていることを思い出す方が膨らむ。

子どもの頃は『アーサー王物語』や円卓の騎士の物語を読んで、エクスカリバーを岩から引き抜くアーサー王、魔法使いマーリン、騎士ランスロットなどと親しくなっていたものだ。今回の読書会でも、図書館からアーサー王関連の本が参考資料として提供された。ここでは、血なまぐさい戦闘が繰り返され、裏切りや復讐が種となり、怨念が歴史を重ねたであろうが、それは他の様々な本から得た知識だ。

作品を読み進んでいると、老夫婦の旅の道連れとなったガウェイン卿がアーサー王の甥として登場し、これには驚いた。イギリス人にとって、アーサー王はそれほどまで身近なのだろうか。

ブリトン人とサクソン人の争いをみると、民族が大きく融合していくときに、各地で起きることは現代も変わらないと思える。サクソン人は、ゲルマンのウォーデンやトールなどたくさんの神を信仰していた。一方、ブリトン人は、4世紀くらいには殆どキリスト教が根付きケルト系キリスト教と言われるようになっていたが、キリスト教が入るまでは、ドル

イドというケルトの自然崇拝の信仰があった。ドルイド僧が活躍する物語もある。それらが入り交じっていく過程では、争いが絶えなかったことだろう。

文中には、旅の途中で立ち寄ったキリスト教修道院での宗教論争が記される。

羊飼いを装うサクソン人の戦士が〈「最悪の行為をベールで覆い隠しておいて、それを償いと呼べるのですか。キリスト教徒の神は、放置されたままの不正義などどうでもいい神なのですか。わが祖先の神は法を明確にし、その法に背いた者を厳しく罰する神でした。」〉と怒りをこめて問う。

修道院の神父が答える〈「私たちの神は無限の慈悲の神です。神の慈悲を悪用してはなりません」〉と。

異なる信仰が出会ったときの場面として心に残った。現在の世界情勢も、このような問答が、武器を持って行われている。

このあたりの展開から、遠巻きに話題を起こして次第にテーマに向かって狭めていく作者の手法を、『日の名残り』（2001年）で体験したことを思い出した。

竜が登場してくることで、いよいよ渦が中心に向かう。

竜は、アーサー王の父ユーサー王がペンドラゴン（竜の頭）とよばれていたように、伝説や物語には度々登場する。しかし、ここでの竜クエリグには華々しさはない。戦士と勇壮に戦う場面はないし、姿を現すこともない。ただ、忘れるという霧を生んで世間を包む竜であった。

過去を忘れさせる象徴として登場した竜は、「忘却」の意味の二面性を鮮やかにする。

過去を忘れる穏やかさを最終章まで老夫婦の旅姿に託し、怨恨の過去を忘れない頑なさを騎士ガウェインや領主に描き込んだ。最初は、過去を忘れて旅に出た老夫婦であったが、竜が退治され霧が消えると、二人とも過去の過ちや怒りを思い出す。

〈懐かしい記憶を取り戻したくてクエリグの死を望んだ。だが、これで古い憎しみも国中に広がることになるのかもしれない。〉

息子の住む村を尋ねようとした老夫婦だったが、夫は妻の過去の不実を思い出す。

〈「妻はほんの一瞬わたしに不実でした。そもそも私のしたなにかが妻を別の男の腕の中に追いやったのかもしれませんが。息子は二人の間のとげとげしさを見てしまいました。もう戻らないと言って去りました。」〉

息子は疫病で亡くなったが、夫は妻に息子の墓に行くことを禁じた。

〈「復讐をしたいという小さな部屋を作っていて、そこに長年鍵をかけてきた。心の奥底に、罰したいという欲望があったのでしょうか。」〉

その墓の場所をみつけに行こうと思立ったのがこの旅だった。徐々に二人の和解を進めたのは、お互いの努力というよりも、「忘却」に助けられたのだが、忘れていたのではなかった結果、最後は二人一緒ではなかった。

作品の中から取りだしたい一文がある。

〈昔ながらの不平不満と、土地や征服への新しい欲望 —— これをとりまとめて語るようになったら何が起こるかわからない〉

現在の世界状況を見せられているようだ。

戦争が起きるのは、昔の苦しさを忘れるからか、それとも恨みを覚えているからなのか。世界には、核弾頭が1万数千発あると聞く。「忘却」を象徴した竜のクエリグは戦士に退治された。だが、新しいクエリグが生まれ、戦争への道を忘却の霧で隠してしまう可能性も感じられる。

竜は「忘却」を象徴し、『忘れられた巨人』の「巨人」は、「記憶」の象徴ではないかと読むと、集団でも個人でも、人間が覚えていたり忘れていたりする現実のあやふやさを浮き彫りにしてくる作品だと思う。

講師 吉川 五百枝

◆ 三行感想 ～ 会を閉じて忘れぬうちに ～

- ❖ 何回か読みかけましたが このファンタジーな世界に入り込むことができなくて とうとう最後まで読むことができませんでした。残念です。(M・Y)
- ❖ 難解！難解。いくらこの文字を重ねても、私には無理でした。構想10年もかけなくてもよいので、もう少し単純なものの方が私には楽でした。あまりにも題材も多いので、どこから深めていけばよいのかと…。巨人(忘れられた)とは？ 登場する龍は何か？サンザシの役目は？ (K)
- ❖ 「忘れられた巨人」とは、個のこと、集団のこと、民族のこと、歴史のことなど、全ての記憶ではないだろうか。(読書会の中で見えてきた) たくさんの疑問も生まれてきた。参加者の声を集めて、ひとつの山をつくる。読書会に参加できたことに感謝。(E子)
- ❖ 読書会に参加して更に深く理解出来て、嬉しかった。蝋燭の使用を禁止された老婦人になぜ禁止されていたのかが、なるほどと判りました。(N2)
- ❖ 忘れられた「巨人」とは復讐や憎しみなどの感情のことだと理解し、だが読書会では「記憶」だと習った。人類は延々と戦い続けているが、過去の憎しみや復讐心を忘れることでしか解決できないし、平和は訪れない。戦いしか知らない中で育つ子どもは、幼い時から憎むことだけを教えこまれてしまっただけでは、人を思う慈悲の心など育ちようがない。憎しみの連鎖は続いてしまう。
救いは「親しくなりすぎて憎しみの炎が弱くなった」という言葉や少年の「この親切な夫婦のことは憎まない」という言葉。こういうことを積み重ねていく以外、平和に近づくことはできないのではないか。「忘れる」ということを考えさせられた。(Y)

- ❖ 老婦人アクセルとベアトリスの息子に会いに行く旅という設定からこの夫婦をとりまく時代、とからみ合わせ、ブリトン人とサクソン人という民族間の問題を提起していた。初めからファンタジーな文章で、ブリタニアという土地柄もあり、何を読み取っていくのか理解しづらかった。しかし妻のことを「お姫様」と呼ぶことで夫婦である前の二人の関係が読み取れたり、“霧”という存在が夫婦の先のことなどの問いかけになっており、自分も“霧”を晴らさせていきたいと思う読み方になりました。読書会で竜は何の象徴か？などの話を聞かせていただき、自分なり“霧”が晴れスッキリでした。「忘れられた巨人」と同じ意味をもつのではないかとって紹介された『ほら いしころが おっこちたよね、わすれようよ』を読むのが楽しみです。(R子)
- ❖ 舞台はイギリス、時代は5C終わりから6Cにかけて。二人の老夫婦の息子を探す旅の途中で試練に会う。民族の対立、宗教の衝突、生活していく上での難しさ、記憶の彼方にあるものの大切さ、決して忘れてはならぬ過去、老夫婦を通して現代の今に通ずることを警鐘しているのでは。(YA)
- ❖ 本の題名から、無知な個人の不信と不安の本質は忘れられる事と記憶に残る(憎しみの連鎖)が続く。歴史は変わることなく、正義と復讐になる現代まで続く。平和へのテーマがあまりにも難しく考えさせられた。(M)

『忘れられた巨人』を読んで

昔のイングランドの、霧の漂う、荒涼とした暗い大地。その片隅でひっそりと、アクセルとベアトリスの老夫婦は暮らしていた。ある日、離れて暮らしている(はずの)息子に会うために、旅に出る。旅の途中、ブリトン人の老騎士ガウェインやサクソン人の戦士ウィスタンなど、いろいろな人と出会う。

不思議なことに人々はクエリグという雌竜の吐く霧のせいで過去の記憶を失い、少し前のことさえも曖昧になっている。断片の記憶をたぐり寄せながら歩む老夫婦。読んでいるこちらも霧に覆われる気配を感じながら、物語は進んでいく。

かつてアーサー王率いるブリトン人とサクソン人の戦いがあった。殺し、殺されるという殺戮で血塗られた民族の記憶。その個々人の記憶を忘れさせることで、互いの復讐心を抑え、平和をもたらそうとした。ブリトン人が行った虐殺をなかったことにすることで、戦いを強引に終結させようとした。人々の記憶を忘れさせる霧は、クエリグの息にかけられたブリトン人の黒魔術のせいだった。

クエリグを陰で守るブリトン人の老騎士ガウェインは言う。

「われわれは多くを殺した。認める。強き者弱き者の区別なく殺した。あのとときのわれらには神も決してほほえまなかったであろう。だが、この国から戦が一掃されたのも事実だ」。

クエリグを倒し、過去の残酷な記憶を甦らせ、「これまで遅れていた正義と復讐」を始めようとするサクソン人の戦士ウィスタンは答える。

「なにを愚かな、ガウェイン殿。大量に蛆を湧かせる傷が癒えるでしょうか。虐殺と魔術の上に築かれた平和が長続きするでしょうか。誠実に願っておられることはわかります。昔の恐怖が塵となり、飛び散るのをねがっておいででしょう。ですが、飛び散った塵は土中で待機し、骨は掘り出されるのを待っています」

二人のやりとりは戦争についての本質を語っているようにも思える。

物語を読み進むと、「忘れる」ことの意味、「記憶」とは何かということを考えさせられる。そして民族の「記憶」、個人の「記憶」とは何なのか、と。

ガウェインは人々の記憶を忘れたままにすることで、平和を守ろうとし、ウィスタンは記憶を呼び戻すことで、隠されていたことを公にして、復讐という新たな戦いを起こそうとしている。人々にとって、一体どちらが幸せなのだろう。民族の封印された「記憶」=忘れられた巨人に、私たちはどう向き合い、どう扱えばいいのだろう。その記憶を思い出すこと、抱えて生きることは、個人が生きていく上で、どんな意味があるのだろう。意味の有無を考える前に、巨人は目覚めてしまうかもしれないけれど。

アクセルとベアトリスも自分たちの「個人」の過去の記憶を取り戻したいと願うようになる。二人で分かち合っていた幸せなときを思い出したい、と言うベアトリスに、隠されたままでいてほしいと思うこともあるのではないかと神父は訊ねる。ベアトリスは答える。

「悪い記憶も取り戻します。仮に、それで泣いたり、怒りで身が震えたりしてもです。人生を分かち合うとはそういうことではないでしょうか」

二人の間にも、暗い過去があった。アクセルとベアトリスは、ためらいながらも、二人の暗い過去とも向き合うことを決心した。向き合う勇気を持つことができたのは、その事実を忘れさせてくれていた時間があったからだ、と、アクセルは言う。

「何か一つのきっかけで変わったのではなくて、二人で分かち合ってきた年月の積み重ねが徐々に変えていった、ということです。結局、それがすべてかもしれませんが、ゆっくりしか治らないが、それでも結局は治る傷のようなものではないでしょうか」

「霧にいろいろと奪われなかったら、わたしたちの愛はこの年月をかけてこれほど強くなれていたのだろうか?霧のおかげで傷が癒えたのかもしれない」

一時、忘れることで救われることもある。しかし忘れたままにしていることは、自分が欠けている状態のような気がする。記憶を取り戻したいと願うのは、自分という個は、記憶の、過去の積み重ねでできていると思うからだろうか。

積み重ねた記憶が奪われることは、例えそれが残酷な内容のものであっても、自己を失うような感覚に近いことなのかもしれない。今を生きるのに、記憶を取り戻したいと願うのは、あくまでも今を生きるため。過去を思い出し、過去の復讐をはたしたとしても、過去は変わらない。わたしたちは誰もが今しか、生きられない。

「今この瞬間におまえの心にあるわたしへの思いを忘れないでほしい。だってな、せつかく

記憶が戻ってきても、いまある記憶がそのために押しつけられてしまうんじゃない、霧から記憶を取り戻す意味がないと思う。だから約束してくれるかい、お姫様。この瞬間、おまえの心にあるわたしを、そのまま心にとどめておいてくれるかい？霧が晴れたとき、そこに何が見えようと、だ」

物語は他にも、いろいろと考える種があちこちに散らばっている。一番の弱者、エドウィン少年の存在も気になるし、船頭と島の存在も気になる。なぜアクセルはベアトリスのことを名前で呼ばず、「お姫様」と呼ぶのか、も大きな謎である。そこにはどんな意味が隠されているのだろう…。

1回の読書会で話すには足りないような、興味深い本である。(C)

カズオ・イシグロという作家を初めて知り、勿論初めて読む本である。そして何とも奇妙で不思議な内容である。アーサー王の甥が登場することから、舞台はブリテン、時代は5世紀おわりから6世紀になる。そこに住む老婦人アクセルとベアトリスが自分たちの息子を探し求めてゆく旅の途中、いろいろあるが、最も大きなものがクエリグが吐く記憶を闇に葬る霧である。記憶がない状態の間は平穏であった老婦人、旅の終末に近づくにつれてクエリグも退治され、霧が晴れやがて記憶が蘇ってこようとする時、アクセルは恐れる。息子を思い出せないことは悲しいといていたアクセルには切ないが過去の言動がベアトリスに及ぼす影響を懸念するアクセルには胸をグサリと刺される。息子の近くにさしかかると、今までべったりと仲の良い老夫婦に不穏が生まれ一人になることをあんなに恐れていたベアトリスが船頭とふたりで先に離れる場面には戦慄を感じる。記憶の回復はすべてがいい方向とはいえないが、しかし過去の記憶はとどめておかねばならない。連綿と続く民族の対立、国家間の衝突、宗教の対立、過去の記憶が無ければ、そこからは何も新しいものは生まれない。

(YA)

本名はわからないが一応の名前をアクセルとベアトリスという老婦人が息子に会いに行く途中で出会う人々との出来事と、霧の中に時折浮かぶ過去の記憶とで物語は進んでいく。忘却により現在の平穏な暮らしを維持していたが、旅をしながら徐々に思い出した過去により、二人の関係は微妙に変化していく。ただ懐かしい記憶を取り戻したいだけの旅だが、記憶は必ずしもいいことではなかった。来し方にはお互い裏切りにあった過去もあり、そのことで息子は離れて行ってしまった。最後の最後にベアトリスは一人島に渡り、アクセルは使命を思い出したのかベアトリスの元を去って行った。一体今までの「愛」とはなんだったんだろうか。

サクソン人のウイスタンはブリトン人に好意を持ち始めたのだが結局ガーウィンを殺しクリエグを殺し、エドウィンを復讐心を忘れない兵士に育てあげると決意し、戦争の口火を切る張本人になるのだろうか。

愚かさ、自尊心、人間の心の奥底に潜む何かを罰したいという欲望、復讐を望む気持ちが巨人なのだろうか。それが今まで竜の吐く息に依って各人の心に埋められ、表に出てこなかったということなのだろうか。

暴力や憎悪の連鎖から起こる争いを避けるには過去を忘れずにそこから学べと言われているが、誰かが覚えていることで争いは果てしなく続くのか、すべての人が過去を「完全に忘れること」で連鎖は断ち切られるのだろうか。記憶と忘却、それぞれの正義、いったい正しいという事は何なのだろうか。すべてが曖昧なままで終わり、読者は考えさせられる。各所に曖昧なままの種がばらまかれ、再読でのまた新たな発見を楽しみにしている。 (N2)

◆ 9月課題本 ◆

『オーロラを求めて』

星野 道夫／著 全国学校図書館協議会

今回は、例会日9月27日が星野道夫の誕生日にあたった。たいしたことではないが、誕生日や命日と例会が重なると、開始時から何となく興奮度が上がる。

この度のテキストは、全国学校図書館協議会が発行する集団読書テキストなので、全体は39ページからなる小型の本である。最終ページに、『アラスカ光と風』に所収されている作品を原拠にしているという説明がついている。

写真を重要な表現手段とする星野道夫の本だが、このテキストには、写真はカラー印刷の「アラスカ山脈とオーロラ」という一枚だけが載せられている。

身近に、オーロラを求めてカナダに撮影旅行をした友人が居る。カメラが凍ってシャッターがおりない経験をしたそうだが、星野道夫のこの写真は、冬のアラスカ、しかもマッキンレー（現在はデナリ）山脈のまっただ中に1ヶ月いて、巡り合わせの良いたった1日に撮ったものだと書かれている。

数年前、東京に行ったとき「星野道夫展」が開催されていたので行った。大きなオーロラの写真数枚で一つの空間が作られていた。オーロラは、あこがれの天体状況だ。しばらく浸っていた。会場は風も無く、気温も空調で快適だし、実際のオーロラの見える状況とは、かけ離れた状態だったのだが。

載せられた1枚の写真が生まれるまでの経緯を、40ページ足らずの紙数で追体験しようとするのには無理があるが、星野道夫の作品は、写真集やエッセイなど数多いから、他の本へ導かれる楽しさがある。

このテキストの中に「自然は人間などが介入せず、放っておくほうがいいに決まっている。しかし、それは、そこに人間がない場合の話だ。ムースの数が減っているのならば、マネジメントの銚先をどうして人間にも向けてこないのだろうか」という文章がある。ムースを餌食にしているオオカミの数を減らそうとするアラスカ野生生物局のプロジェクトについての話だが、この文の後は、すぐに丸太小屋の住み心地の話が続いていて、解説めいた文章はない。

アラスカにすむ人たちには、狩猟は生活の一部になっていて、ムースやカリブーの肉は食生活の一角を占めているようだ。そういう筆者自身も、大好きなムースのシチューにしたつ

づみをうちながら話しているし、ムースの干し肉は、撮影行の大事な食料となっている。自分もムースを食べながら、ムースの数のマネージメントの話をしている星野道夫は、後年、『ナヌークの贈りもの』（小学館 1996 年 1 月）という写真絵本にこう書いている。

ナヌークは、氷の世界の王者。昔から、人びとは氷の世界の王者シロクマをそう呼んだ。そして、主人公の少年は、ナヌークの声を聞く。

〈「われわれは、みな、大地の一部。おまえがいのちのために祈ったとき、おまえはナヌークになり、ナヌークは人間になる。いつの日か、わたしたちは、氷の世界で出会うだろう。そのとき、おまえがいのちを落としても、わたしがいのちを落としても、どちらでもよいのだ」〉

この言葉が体現されたように、星野道夫は 1996 年 8 月、ロシアのカムチャツカ半島の湖畔にはったテントで就寝中にヒグマに襲われて今生の生を終わった。1982 年に念願のオーロラ撮影を実行した今回のテキストの記述から 14 年後のことだ。彼の死が報道されたとき、その半年前に出版されたこの『ナヌークの贈りもの』が、彼の遺書だと感じられた。

〈おまえがいのちを落としても、わたしがいのちを落としても、どちらでもよいのだ〉とは、強い生命維持本能を持つ私にとっては、息を呑む言葉だ。彼は護身用の銃を携行しなかったという。私は手という強力な武器をもって本能に従う。この夏だけでも、どれだけの蚊やムカデとの共存を我が手で拒んだことか。私に見える所に来ないでおくれ、と願うしかなかった。しかし、考えてみれば、蚊もムカデも私も〈われわれは、みな、大地の一部〉なのだ。いのちは繋がっている。間もなく蚊もムカデも私も、〈われわれ〉になるだろう。生命維持の本能に従うのは、せいぜい 100 年のこと。〈われわれ〉のいのちの営みは量り知れない。

星野道夫は、43 歳までしか生きられなかったが、彼の思いは、たくさんの写真や文字として残り、受け継がれている。その中に分け入る入り口として、このテキストが子どもたちに向けて編まれたのだろう。

福音館から出ている『たくさんのふしぎ』のシリーズの中にも、作品が数冊あるし、それをハードカバーの絵本にしたものも、会場の図書館から提供された。また、文中で、筆者がアラスカのキャンプで読んだと紹介されている『エンデュアランス号漂流記』（彼が読んだのは英語版）も作者や表題や訳や大きさの違う 3 冊が並んだ。筆者が妻になる女性に良い本だと推薦した『すばらしいとき』（マックロスキー 福音館 1980）も、手紙の写真を載せた雑誌と共に紹介された。

自然の美しさと厳しさ。自然への恐怖が畏怖に変わっていくことや、朽ちはてたトーテムポール。〈食べる分だけで良い〉という文章など、40 ページの背後にたくさんの思想や歴史を語る本がっつらなっていることが感じられた。

本は、手にした 1 冊だけがあるわけではなく、地下茎のように世界を広げている。読書会は、その一端を掘り出す楽しみに満ちている。

講師 吉川 五百枝

◆ 三行感想 ～ 会を閉じて忘れぬうちに ～

- ❖ 課題本よりも星野さんのヒグマ事故死が頭から離れなかった。人間としての常識から出られない私。しかし、星野さんの心には、死の前10年から動物が命を落としても、私が命を落としても、どちらでもよいのだ。厳しい自然の前にはコントロールが入ってはいけない。自然に身を置くことなのだと思って怖くなりました。(M)
- ❖ 自然はきびしい。命も尊い。動物の写真でも特に親子をとっている星野さん。現地の人の目線で考えていこうとしている星野さんのやさしさを感じる。くまを撮ってくまに殺されたことをしみじみ残念に思う。共存だけでなく共死も考えてしまう。(TK)
- ❖ オーロラに魅せられた一人冒険家、写真家の話です。とても薄く軽い本ですが、活字の奥に秘められたものは自然との共存、自然の中に自分の身を置いていることの意義、命の尊厳、果てしない課題が含まれています。是非に読んでみてください。関連本も多くなります。(K)
- ❖ 「いのち」と向き合っていた星野道夫ではなかったか。短い文章から、「いのち」に向き合う姿勢を読みとくために今日も多くの本に出会うことができた。自然と共存し、自然の中に身を置き続けた星野道夫。彼の著書は教科書の中にとりあげられている。おそらく理解できないことが多い。10年後に気がついてよいので心の中にとどめておきたい「ものがたり」と思う。(E子)
- ❖ ムースが減っているのは狼のせいだと考え、狼を殺してしまう人間。なぜ人間に鋒先が向かわないのかと怒りを見せる星野さん。「お前(動物)が生命を落としても、私が生命を落としても構わないのだ」と言わしめる程の徹底した自然との共存という星野さんの意識。読書会で沢山の絵本や写真集、小説を紹介され、是非一冊ずつ読んで星野さんの深い思いをもっと知りたいと思った。(Y)
- ❖ 自然のきびしさ、美しすぎる自然、自然の恐怖など、さまざまな言葉が“自然”にはたとえられる。星野さんの写真や文からは、大げさすぎない、それこそ自然体で描写される世界があり、それが読み手に深い感動やイメージの広がり、ひいては“生きる”ということを考えさせられた本でした。(R子)
- ❖ オーロラと言えば幻想、ロマンを想い抱かせる自然現象だと思う。アラスカの厳しい自然の中に一人で撮影に成功するまでの紀行ものである。決して物見遊山では出来ない色々な困難を迎えうち乍ら、現地の人たちの親切や自らの強い信念で目標に立ち向かう姿勢に憧れを持つ。アラスカのデナリ山を自分の目で見たいものだ。(YA)
- ❖ アラスカの自然のきびしさ雄大さがわかりやすく書かれていた。ムースのシチューを食べながら「ムースの数が減った原因は本当にオオカミの数が増えたからなのか」と会話

しているあたりは興味深かった。3月2日のオーロラ撮影時は最高潮。
会では深い話をたくさん聞き理解できない部分もあったが楽しかった。(KT)

『オーロラを求めて』を読んで

『アラスカ光と風』星野道夫

漠然とした北方への憧れが、アラスカというはっきりとした形として現れ、アラスカ北極圏にある小さなエスキモーの村の空撮写真この村を訪ねてみたいと思った。1971年19才思いがけないアラスカのシシユマレフ村に着いた。アラスカ大学の学生になる。

1978年アラスカに住みシシユマレフ村を訪れる。50年のエスキモー社会の変貌には目まぐるしいものがある。彼らにとって選択の余地がないほどの速さで新しい価値観に取り囲まれていった。貨幣、経済、開発・テレビの普及、学校…。そのうち最も大きなものに言語の問題がある。アメリカ合衆国の原住民政策の一環として強いられた結果である。言語はその民族の文化の住にもなるのだ。日本語がいちか消え去ってしまうなど、だれが想像できるだろうか。自然はいつまでも優しくない。結果の分かれ目というのはまわりの状況以上に、ぎりぎりのところでの気持ちの持ち方次第で決まってしまうのではないだろうか。ブッケンインディアンが抱えているさまざまな問題を話し合った。油田開発がもたらすであろうカリブへの影響それにとともに猟銃生活の存続への不安、消えてゆくことする言語、古い価値観の喪失、自殺、若者たちの未来…。それは新しい時代とのはざまであらう先住民全体が直面している問題でもある。旅をしなければ見えないもの、そこに根をおろして暮らさなければ見えないもの、その両方の風景の中に身を置く、自然と人間との関係。それが自分が写真を撮りつづけてゆくテーマです。1996年没とあり若くして亡くなっていますね。命を燃え尽きさせたのでしょうか。(M子)

星野さんの写真集をみて動物の親子のシーンが多くしかもその親子のしぐさのタイミングのよさには思わずほほえんでしまいました。

自然のきびしさ、とりわけ氷点下-40℃の中で、星野さんや動物が生きていく知恵や本能に感心させられます。動物や自然の中で共存してく星野さんの謙虚な姿勢を感じます。

ジャズをきいて氷をとかしてコーヒーをのむひとときを大切にしていらっしゃいました。

自分がなぜこういうことに挑戦しているのか自問をしていましたが、自発的に行動し、やり遂げようとするのが人間を成長させ成功するものだとつくづく感じました。

熊を大切にしていたのに熊に殺されてしまった星野さん。銃ももたないというモットーをつらぬいていました。信念をやりとげる生き方に感心しました。そして動物や現地の人々の目線で感じる星野さんに優しさを感じます。(TK)

課題本は星野道夫の『オーロラを求めて』。

奇しくも今日 27 日は星野道夫の誕生日。生きていれば 64 歳、死後 21 年。今も多くの愛好者が彼の「生と死」を考え、死してなお燦然と輝いている。

◆オーロラに何を求め、オーロラの向こうに何を見ていたのか？

P8「オーロラ。この不可思議な自然現象。北の空から現れ、次第にその輝きを増し、まるで生き物のように天空を駆けめぐる冷たい炎。それはまず冬の到来を告げ、その輝きを次第に失いながら春の訪れを知らせてくれる。」初めはこの光を求めていたのだろうが、極北の冬のデナリ山をバックに撮影に挑み、これまで見たこともない美しさに魅了され、激しい動きや強さに圧倒され、恐怖感に襲われる。彼がオーロラに求めていたのは、自然への畏敬であり自然の中で自分がいかに小さい存在であるかを確認したかったのではないだろうか。

またオーロラの向こうに、自然の中で人間が奢りなく存在し、目に見えないものに対しても敬意を払い価値を置く世界を夢見ていたのではないだろうか。

◆違和感なく読者を引き込むのは

卓越した文章力であると読書会で学んだ。感動を大げさでなく 淡々と、理解に悩む曖昧な言葉でなく、そこに生きている者として分かりやすい言葉を紡いでいる。

◆大義名分ではない「自然」。

彼自身も、彼の死後の人々も考え続ける「人間と自然とのかかわり」とは

彼は、自分も極北の動物たちも狩猟の民もみな“尊卑”の差なくいのちを育み、仲間と共に厳しい自然を生き抜き、尊厳を持った存在であると考え。この想いを彼は『ナヌークの贈り物』の中で「大地の一部」と著わす。

「われわれは、みな、大地の一部。おまえがいのちのために祈ったとき、おまえはナヌークになり、ナヌークは人間になる。

いつの日か、わたしたちは、氷の世界で出会うだろう。そのとき、おまえがいのちを落としても、わたしがいのちを落としても、どちらでもいいのだ」

彼の生き様に裏打ちされた「大地の一部」という言葉を胸に、私達は「人間と自然とのかかわり」を考え続けなければならない。急速に発達した現代科学や文明、これからも発達するであろう未来に向けて真剣に勇気を持って。人間は自然の征服者ではないのだから。それを教えてくれたのは星野道夫の著書たちであった。 (S)

◆ 10月課題本 ◆

『鹿の王』

上橋 菜穂子/著 KADOKAWA

『鹿の王』を読書会で読みたいと思っても、上下2巻で1000ページを越す作品である。この読書会は毎月1冊のペースで読んでいくから、厚みのある本の2巻となれば、1ヶ月で読み終わるのは難しい。そこで9月を含んで2ヶ月間貸りる事ができるように図書館から手配をしていただいた。

上橋菜穂子作品は、度々評判になっていて手に取ることが多い。それだけに、作品の雰囲気似ていると、他の作品の人物がダブって見えたりする。

『鹿の王』を読んでいると、『精霊の守り人』に始まる「守り人」シリーズのあの女用心棒バルサや成長していくチャグム皇子が、新しく登場したサエやユナを影のように彩る。どちらの作品にも実在する国や民族はない。けれども、作品の中でちゃんと地図が書ける。それどころか、共々に彼女の作品世界を一つのジグソーパズルのように組み込んで図柄を大きくしていく。

〈茫漠たる地平が感じられるのが好き〉〈読者が風を感じて、雲間から射した光が見えてほしい〉とも言われる。虚構を特質とする小説だが、その中のリアリティを大切にしているという物書きの姿勢だろう。

『鹿の王』の始まりの舞台は岩塩鉱だ。日本には地形上岩塩鉱はないとされている。実際のものをみたことはないが、アルト・アウスゼーの岩塩鉱は。ヒトラーが組織的に略奪したヨーロッパの名画や彫刻を何万点も隠していたことで知られている。映画で見たこの岩塩鉱の様子が蘇った。虚構であろうと、吹く風が見え、光が動くのを感じられなければ1000余ページもついていけない。上橋作品は、その点では安心して読みに身を委ねられる。よく、こんなに書けるなあと量と質に驚嘆してしまう。

目に見えるような岩塩鉱の描写から始まって、生きものの生命についての物語が蕩々と流れ始める。

岩塩鉱に虜囚となったヴァンと、彼と出会うホッサルという医術師が主な登場人物だが、人物名も、漢字にカナの読みをふったり、カタカナで登場するから文化の系列はわからない。しかし、第1章から、捕虜になっているヴァンが登場するので、戦いは避けられず戦うからには権謀術数が横行しているわけで、その意味では、今の人間のすることとあまり遠い

ところの話ではない。しかし、人対人の疑心だけではなく、病という主題が底を流れていく。

岩塩鉱でヴァンが見たのは、累々と転がる死体だった。数日前、山犬に似た黒い獣に襲われて、鎖に繋がれた捕虜はみんな噛まれて病を発症し亡くなった。ヴァンも噛まれたが、たった一人生き残る。なぜだろう。死と生をわけたのは何だったのかを疑問に思いつつ、ヴァンの逃亡奴隷としての旅が始まった。

旅は、出会いと別れの繰り返しであり、そこに生まれる愛憎が生きることの内容となる。生き残ったヴァンが、たくさんの出会いを重ねていく様子が書き継がれ、二人の主たる登場者がであるのは、下巻の第10章に至って初めて実現する。

それまでに、多くの死をもたらしたのが黒狼熱という病毒を持つ菌であり、その対応をめぐって治療薬と呪術との相違や、新薬と旧薬の支持者の言い分、病毒と闘う力をつける努力など舞台は整えられていく。

岩塩鉱で獣に噛まれても自分だけが生き残ったのはなぜか、それを問いかけるヴァンと、説明していく医術師ホッサルの会話が続き、読者もヴァンと一緒に死ななかつた理由を教えてもらうことになる。そこに〈病み済み〉という言葉が登場する。今私たちが病気によってはワクチン投与で防いでいる事実思い当たる。

〈自分の身体の中で、いま、このときも、目に見えぬ小さな何かが病とたたかっている。そうやって、自分の命を支えてくれている。〉不思議な身体の仕組みについて、ホッサルと話し、助手のミラルと話し、読み手もヴァンと同じように納得していく。ここで話されている黒狼熱が、祖先から受け継いできた宿主としてのヴァンと共存し害をしないということは、外来の病気に冒される歴史をくりかえしている世界中の例を思い起こさせる。作者は、専門家の知恵をもらって書いたにしても、自身が研究者ではないから、「不思議」としか言い表せないことにたくさん出会って、目を輝かせたであろう雰囲気が伝わってくる。

〈「身体の死って、変化でしかないような気がしちゃうんです。まとまっていた個体が、ぱらっと解散しただけ、のような」ミラルのこの言葉に、うなずきながらも、〈この世に生まれた、たったひとつの形である私が消えることは... 哀しいものですよ〉とヴァンはつぶやく。私の心にもずしんと沈んだ。ミラルの言葉は、私の知ることと同じようなことなのだが、死を悲しみややるせなさとして受け取ってしまう現実の私もいる。

表題の「鹿の王」は何だったのか。鹿の王は、群の存続を支える尊ぶべき者であって、支配する者の意味は持たない。〈過酷な人生を生き抜いてきた心根をもって他者を守り、他者から慕われているような人のこと〉だとヴァンは説明している。

〈低く構えしこの角は 弱き命の楯なるぞ...〉書き出しのこの言葉が、最後の場面につながっている。ヴァンは、病毒を持つ獣を引き連れて深い森に消えていく。王であることは、なんとも尊く哀しいものであることか。しかし、もしヴァンが今の世に実在する人物なら、この解決法について敬意を持つゆえに何も言えないが、想像世界の作者には、全く異なる次の一步を創作して欲しかった。文化人類学者としての上橋ワールドには、どこかにその芽が

あるのではないかと期待したい。ヴァンは森に消えたが、それが命の終わりではないことを、ホッサルの手に残されたヴァンの血清が象徴する。

講師 吉川 五百枝

◆ 三行感想 ～ 会を閉じて忘れぬうちに ～

- ❖ 壮大な物語でした。社会問題、医療問題等、様々な提起があったように思えました。『鹿の王』となる者は、自分の命を賭けユナや他のものを守るために森の中に入って行く。ヴァンの姿は、人として生きる姿だと思う。(E子)
- ❖ 読書会ってなんて良い時期に良い本を課題にされるんでしょう。前回のカズオ・イングロといい。今回の上橋菜穂子さんの作品も。読書会があつてめぐり会ったもの。読書会に参加して本当にうれしい。(N2)
- ❖ とにかくわけがわからなく途中でヴァンが追いかけてる所からおもしろくなりました。読書会でたくさんの人の感想で深まり感謝しています。医療、民族、難民、政治たくさん問題を含んでいる。(TK)
- ❖ 面白いの一語につきます。上下巻すごい頁数ですよ。めげないで挑戦してみてください。話のスケールも大です。でも話のどこにスポットを当てて読むのもいいかも知れませんヨ！ 現代の状況にもあてはまるかも… 色々な読み方が出来ると思います。(K)
- ❖ 壮大でスケールの大きいファンタジーも思われる世界が広がる物語。生き方も生い立ちも違うヴァンとホッサルの二人を通して生きる為に降りかかる困難や悩みを迎え撃つ。現在の私達にも同じ様な困難が覆いかぶさっている。(YA)
- ❖ 身体の内と外の不思議な感覚。目に見える世界と見えない世界。この世界で共生と葛藤を繰り返しながら、太陽光の大きな世界の前では全てが巡回して時間はかかるけどまわっていく希望になれば良い。(M)
- ❖ 大変長い物語だったが、先が気になり、どんどん読み進むことのできた本だった。民族紛争や移民、避難民の問題、新しい病と新薬開発など、現代にも通じる様々な問題点が散りばめられた広大なストーリーだった。たとえ民族が異なっても、家族のように生きていけるという部分に救いがあり、全体を通して暖かいものが貫かれている。涙と共に迎えたラストのその後が気になる。(Y)
- ❖ 長編だったが、ストーリーの続きが知りたくてスムーズに読めた。森の奥へ行ったヴァンは、その後どうなったのか？ ユナとサエは？ 病気の事、免疫学の事、政治の事な

ど、現代に通ずるものがあると思った。命のあり方について考えさせられる事が多かった。(KT)

『鹿の王』を読んで

冒頭に光る葉っぱ話、終りにも光る葉のこと、生き物はみな、病の種を身に潜ませて生きている。ウミウシ日本にも200種はいると。ハチの干潟にもいます。初めて見たとき、なんときれいで、グロテスクなのでしょうと思いました。自分の知っている事柄が出てくると読んでいて興味がわきます。

ホッサルは緑の藻（光る葉っぱ）の卵を通して、生、死、病のことを思い医術の道に進んだのでしょう。医術はすべてに関わっている。医術は人の命を救うだけの技ではない。この世が、どのように在るか、命とは何かそれをどう考えるか、そういうことのすべてに関わっている。

人は理屈を後で作ることが出来る生き物だ。

甘い言葉ではなく冷徹だが、ひとつの例外もないこの世の無常をつきつけて、生まれて消えるまでの間を哀しみと喜びで満たしながら。

故郷を守るため、絶望的な戦いを繰り広げた戦士団の頭ヴァンは奴隷に落とされ囚われの身となる。

飛鹿の群の中には、長でもなくても危難に逸早く気づき我が身を賭してたすける鹿が。こういう鹿を尊び〈鹿の王〉と呼んでいます。群を支配する者、という意味でなく本当の意味で群の存続を支える尊むべき者として。読みながら頭の中は大スペクタクルの光景が、うずまいていました。映画を観たら、どうなりますかね。(M子)

物語の設定場所は一体何処だろう。読み終わってこれは世界の今の至る所に当てはまる舞台ではないだろうか。多民族との領土問題、そして移住民、得体の知れぬ病気の蔓延、近代医療を受け入れる医術師たち等々、正に現在の世界が抱えている環境と同じに見える。ヴァンやホッサルのように自分の置かれた立場、運命を自覚し、困難に翻弄され悩み乍も生きていくうち、和が見つかったり解決への明かりが点される時をつくる。最後に病素を体内に宿すヴァンが群の危機に命を張って守る鹿の王たる姿を守り、部族を救う為、森の奥にオッサムたちを引き連れて還っていく場面はシンとなる。何故？ 還って行かなくても。せめてサエやユナ達と会えればいいが。(YA)

飛鹿に乗り、故郷を守るために戦い、敗れて奴隷となった戦士ヴァン。その後黒狼熱という病にかかるが、多くの人々が亡くなる中で生き残る。その因縁ある黒狼熱と闘う天才的な医

術師ホッサル。二人の主人公、ヴァンとホッサルを軸に、病や民族の争いを内に秘め、物語は廻っていく。

グイグイと物語の世界に吸い込まれた。文化人類学者で、ローズマリー・サトクリフが好きだという上橋氏の世界は、骨格がしっかりしていて、登場する人々は確かにその世界に息づいている。飛鹿や火馬など魅力的な動物たちが更に彩りを添える。ファンタジーの形を取りながらも、現代社会を見ているような、あまり異世界のような印象は受けず、上質なミステリーのような感もあり、読み応えたっぷりである。

生物としての生と、人としての生。

ヴァンは今までの人生から、ホッサルは病から、生きることを探っている。生きるとは何か、そのことを医学から、自然科学から、宗教から、人との関わりから、争いから、憎しみや喜びから、あらゆるものの中から見出そうとする、壮大なテーマを秘めたこの物語。読了し、そのことを考えれば考えるほど、大きな渦に巻き込まれ、沈んでいくような感覚が私には残った。強く感じるのは、命のしたたかさである。ちっぽけな私の体の中の多くの命の営みが、世界に繋がるような法則を秘めている。その繋がり、喜びを感じつつも、めまいにも似た恐ろしさを感じる。

恐ろしい病気を身に抱いて、病原菌となる犬達を率いて、深い森へと姿を消した、ヴァン。己の命を張って群を逃がす鹿一まさに鹿の王たる行為であり、ここで物語を終わることも出来ただろう。ヴァンの犠牲によって、人々は救われました、と。しかし上橋氏はそのヴァンを追う。ただの哀しい物語ではなく、希望ある明日へと導いている。

「才というのは残酷なものだ。ときに、死地にその者を押し出す。そんな才を持って生まれなければ、己の命を全うできただろうに、なんと哀しい奴じゃないか」。「そういう鹿のことを、呑気に、〈鹿の王〉だのなんだのと持ち上げて話すのを聞くたびに、おれは反吐がでそうになるのだ」。「弱い者が食い殺されるこの世の中で、そういうやつがいるから、生き延びる命もある。たすけられた者が、そいつに感謝するのは当たり前だが、そういうやつを、群れをたすける王だのなんだのと持ち上げる気もちの裏にあるものが、おれは大嫌いなのだ」。「〈鹿の王〉に対するヴァンの父親の語った言葉である。『気もちの裏にあるもの』を蹴散らすように、ヴァンに拾われた幼いユナは仲間達と飛鹿に乗ってヴァンを追って行く。周りの大人達の価値観を笑い飛ばすような、熱いパワーが心地よい。排除ではなく、受容を。きっと命は清濁併せ飲むのだ。それでこそ命、生きるということ。そんなメッセージも聞こえてくるような、飛鹿の疾走。

ヴァンも言う。「その中で、もがくことこそが、多分、生きるということ」。

きっとこのエンディングは『鹿の王』と題したときに、決まっていたのだろう。

命は繋がっている、身体の死は、変化でしかないと、ホッサルの助手、ミラルは言う。それでもこの世に生まれた、たったひとつの形である私が消えることは、哀しいものだ、とヴァンは言う。私もそう思う。

そう、私はたったひとつだ。一度きりの命だ。(C)

上橋菜穂子ワールドに魅了された。久しぶりにどっぴりと。上橋作品は私をとてつもなく広く高く深い世界の一部であることを実感させてくれる。しかし課題本『鹿の王』の魅力をどのような言葉で紡いだらよいか、私は悩み続けた。

魅力1：人類が太古から陥ってきた「支配欲の罪深さ」

東采瑠(ツオル)帝国の皇帝、王幡侯のように支配に駆られる者+アカファ王国やオタワル聖領のように支配者に加担する者+モルファ氏族のように強かに共存共栄を企む者=支配する者VS火馬の民のケノイのように従属に反抗する者。人類は太古からこのような戦いに明け暮れてきた。多くの民は戦いの中に放りこまれ生活苦のなか従属するしかないというのに。21世紀の現代社会もこの構図は全く変わらない。残念なことに人類は「支配欲の罪深さ」を学ばないようだ。上橋は、

「防衛の負担、不平等な税、移住民の問題……確かにアカファ人を苦しめている問題は多い。しかしそれは政治的駆け引きによって解決すべきことであって、反逆や陰謀によって解決を図るような類のことではない」と言いきる。何という小気味よい痛快さ。

魅力2：終わることのない病理と医学の闘い

我々生き物の身体は神秘に満ちている。身体の命は意志や魂とは関係なく維持されている。「身体も国もひとかたまりの何かであるようだが、雑多な小さな命が寄り集まり、それぞれの命を生きながら、いつしか渾然一体となってひとつの大きな命を繋いでいるだけ。」と上橋は描く。最新医学の進歩は著しく、病理学も免疫学も薬学も急速に解明されつつある。ホッサルは現代医学の象徴のように描かれ、彼の指導の下綿密な観察と分析、多様な実験考察等のためめぬ努力を垣間見ることができる。それに病理は刻々と変化する。パンデミックの恐怖を思うと終わることのない闘いである。

「生き物はみな病の種を身に潜ませて生きている。身に抱いている病の種に負けなければ生きていられるが、負ければ死ぬ。」

「私たちの身体が病んだり老いたりして死んでいくと土に還ったり他の生き物の中に入って命を繋いでいく」と。星野道夫の『ナヌークの贈りもの』を思い出す。私は潜在意識でこの境地に至るまで、生きたいという欲と闘い続けなければならない。難儀なことである。

魅力3：作品に漂う虚しさは般若心経

アカファ王国と多瑠やトゥーリム、オタワリ聖領ホッサル、火馬の民<犬の王>ケノイの4者から命を狙われるヴァン。生き残るために懸命に戦う。そんな男を上橋は

「飛鹿の群れの中には、群れが危機に陥ったとき、己の命を張って群れを逃がす鹿が現れるのです。そういう鹿を<鹿の王>と呼んでいます。ですから私たちは過酷な人生を生き抜いてきた心根をもった他者を守り、他者から慕われているような人のことを心からの敬意を込めてその人を<鹿の王>というのです」と言う。

まさにヴァンは〈鹿の王〉である。ヴァンは愛する妻や息子を病で亡くしガンサ氏族の独角の頭として戦いに負け奴隷となった。岩塩鉱で半仔に噛まれ生き残ってもなお、心の底に「虚しい」想いを抱える。時折著されるその虚しさに私は色即是空を感じた。読み進めていくうち「般若心経」が聴こえてくるようになった。

「生きることには多分意味なんぞないだろうに。在るように在り、消えるように消えるだけなのだろうに」と、この「無常観」に行きつくまでに上橋自身どれだけ長い時間深く苦しんだのだろう。ヴァンの虚しさは私に作品の奥行きを与え続けた。

還って行く者

〈鹿の王〉ヴァンは飛鹿に乗って森へ還って行った。その後彼を追った者達ときっと穏やかな日々を過ごしたことだろう。

やがて彼は死んでいくだろう。「在るように在り、消えるように消えるだけ」と思いながら。見事な生き様・死に様である。

私達に「この世で今をどう生きるか」ということを真摯に考えさせてくれる上橋菜穂子ワールドの魅力はまだまだ消えそうにない。(S)

この物語は架空の国で、文化や生活も作られたものである。でも、難民問題・テロ・医学・生物兵器などの社会問題をにおわしている。鹿の病気や菌を利用して圧制者を滅ぼそうとしているのかもしれないのか、偶然なのか人々が疑っている。今の社会の出来事を森や国に例えることもできる。上下合わせて1100ページに及び読むのも大変でした。私達の今の悪い出来事は偶然なのか意図的なものなのかテロのように黒幕がわからないところがある。どちらにしても人間はいつか死ぬのだからとあきらめることもできる。だれが敵でだれが味方か、人間の危うさも含めていろいろなことを考えさせられた。(TK)

実に面白くて壮大なドラマでした。

それぞれの属性によって生きる場所を定められ、命を宿しその生をいかに繋げるか。

それはヒトだけでなくヒトを形作る臓器、細胞までもが各々の存在を繋ぐために活動している。細菌、毒、その他、悪とみなされるものも例外ではありません。

ヴァンも体に入った黒狼熱の病素に侵されることなく免疫を得て、研ぎ澄まされた嗅覚、視覚、運動能力、腕力、を得ます。しかし病素と共存しつつも時によりヴァンの人間性が黒狼の野性性になかされそうになるのです。それはまるで大国が他国に侵略し、独自の文化に影響を与える様と似ています。この病の治療に対してのオタワル医術と清心教医術の対立、病素を宿した犬を使つての大量殺人計画、モルファとして使い捨てる道具とみなされる一族。鹿の王とは群れが危機に陥った時に、己の命を張って群れを逃がす鹿、群れの存在を支える尊むべき鹿なのですが、ここでまた一ひねり、才とは。才とは残酷なもの、敵前で踊っ

て見せる鹿はそれが出来る心と、身体を天から授かってしまった鹿。その才がなければ己の命を全うできたのだが。

もうとにかくどの断面から読んでもいろいろと深く考えさせられる物語です。(N2)

◆ 11月課題本 ◆

『永い言い訳』

西川 美和/著 文芸春秋

この小説を読むと、小説家ってなんぎな仕事だなと思う。生きていくのには、言わなくてもいいことや言えないことがいっぱいあるだろうに、それを言葉にせずにはおれないのが小説家なんだろうな、なんぎなことだわ、と思うのだ。

作家の小川洋子さんの発言を借りれば「取り繕えない人、小さい声でしか言えない人のことを“やっかいな言葉”を使って書くのが小説だ」と言われるが、この作品の主人公である衣笠幸夫は、そのやっかいな言葉で生きていこうとする小説家なのだ。

小説家のことを小説にする。難儀な上に難儀なことを重ねているようなこの作品だが、〈だけどね、ぼくだって考えましたよ〉ほーら、来た！という感じが早々とやって来る。

小説家らしい言い訳が、スキーバスの事故で亡くなった妻、夏子の遺体を連れ帰るときの場面から始まる。小説家らしい言い訳だと思うのは、状況から結論までの間に、たくさんの言葉を差し挟むからだ。しかし、たくさんの言葉を使っても、客観的な多方面からの見解を縷々記すのではなく、常に自分を中心において考えている人物を描こうとしているのだろう。主人公の仕事が津村啓というペンネームを持つ作家だというのだが、読者は、津村啓の作品を読むことは出来ず、津村啓が言葉としてどのような表現をするのかは知らない。その人の作品ではなく、作家個人の内部事情を語るのであれば、小説を書いている衣笠幸夫を操っている作者の西川美和が小説家なのだ。衣笠幸夫が小説家であることは特に重要なわけではなく、言葉数をたくさん持ち、内心の動きを細かく説明できるという利点を、小説家の西川美和が利用しているという意味しかない。

衣笠幸夫の姿を通して、小さい声でしか言えないことを、まるで繕い糸をほぐすように解いて行って露わにしていく。

R社文芸部の編集者から津村啓に送られた手紙が登場する。その中に〈ものを書く者の葛藤だけが、人間の、解決不能の孤独や絶望に寄り添えるのだ。〉という一文があって、私もそう言われればその通りだとは思うのだが、この手紙を津村啓が三度地面に叩きつけることになっているのも理解できる。西川美和が、叩きつけたいのだ。

もし人生が、「長い言い訳」ばかりですむのなら、きっと手紙を叩きつけるほどのことにはならないだろうが、この世界におきることは、死ぬまで延々と続く「永い言い訳」になる

のではなかろうか。ものを書く者のみならず、生きる上での〈葛藤〉は、〈寄り添って書けるような〉しろものではないだろう。西川美和の知る人生は、言葉をいくら費やしても書ききれない葛藤ばかりだとよく知っていればこそ津村啓にさせた行為だ。

西川美和は、「相撲で言えば、8勝7敗でよしとする」という価値観を持っているそうだ。ここまで生きて来たのだから、1勝分は負け数より勝っていると思うが、いつでも勝敗数がひっくり返りそうなのが我が人生だとみている点で、津村啓も西川美和も、そして私も同僚だ、7敗を痛みとして解っていればこそ、編集者の手紙には、「ほんと、ほんと」と同意しつつ、やはり叩きつけたくなる。(私は、叩きつけるほど大胆にはなれないが)

小説家の津村啓に対比するような登場者が、トラック運転手の大宮陽一である。

津村は、〈自分の生業や現状を赤の他人に詮索されたくないという売れない頃のいじけた思想〉を定着させ、〈ぼくという、醜い自意識のかたまり〉を連れ歩くことから妻に手を引かせるような人物だ。〈愚かで幼稚で無分別で、何の存在価値もないようなグズ〉というのが自意識だから、妻は、わかっているにもかかわらず内心辟易する部分があったかもしれない。

対する大宮は、〈健全な堅気の世界の人〉で、明るくいじけたところがない。自意識をほじくり返すような描写はなく、我が子への愛おしさも開けっぴろげだ。

常に自分から目を放すことの出来ない津村と、気持ちのままに自分から目を離すことの出来る大宮の違いが2色刷りの絵のように見える。そして、読者は、自分がどちらに親近感を持つのかと考えるだろうと作者の意図を想像した。しかし、現実の自分の中身は、〈タイヤのパンクした乗り合いバスを、みんなして押しているようなものだ〉というのが当たっている。津村も大宮も私の中に居て、〈壊れたバスを自分たちで前に進ませる力の合わせ方〉を、なんとか解っているつもりで生きて来た。

〈もう愛していない。ひとかけらも。〉

妻の遺品となった携帯電話に残っていた一文。

激流もなく、淀みもなく流れてきたようなこの作品の中で、突然流れの中に現れた尖った大きな岩にぶつかった感じだ。

このメールの下書きを読んで幸夫は〈のけぞった〉らしいが、読む方もけぞった。〈何だそれ〉と言う幸夫と同様に、何だそれ、と思う。だから、この世には言わなくてもいいことがいっぱいあると私は思うのだ。

生前の妻の夏子のことを振り返ってみても、〈一方的に迷惑を被っているような顔をするが、そっちがそんなだからこっちだって〉と幸夫も耐えていたのだと独白する。これは、作者の観察から出てきた言葉だろう。〈そっちがそんなだからこっちだってこうなる〉ということは一般的には確かに多い。だが、〈こっちがこんなだからそっちだってこうなる〉と言ってもいいはずなのにそうは書かなかった。幸夫には、この逆転の発想は生まれそうにない。

作者が選んだ「言い訳」という言葉は、自分の立場で自分から見える範囲でしかものを見ないままで使われる言葉だと思う。しかもあらゆる種類の知る限りの言葉を駆使して。

作家としての津村啓を、西川美和は言葉で事細かく非情に刻みながら、陰りのない大宮陽一の妻への恋慕を横で聞く津村啓の目の色をとらえて描写している。〈誰ともわかちあえぬ、鉛のように、光のない目の色〉と。

「言い訳」は、誰とも分かち合えぬと知りながら、それでも解ってもらおうとする努力だとも言える。その努力が虚しくとも、〈他者の無いところに人生なんて存在しない。〉と幸夫は思う。他者としての妻を、想うことのできる〈あの人〉として自分の中に住ませる事ができるようになってはじめて幸夫は小説家として次に進もうとする。

作家は、どうやって小説を書き終わるのか。読み終わるといつも思う。生きている限り「永い言い訳」が終わるとは思えないからだ。やはり、小説家って、なんぎな仕事だな。

講師 吉川 五百枝

◆ 三行感想 ～ 会を閉じて忘れぬうちに ～

- ❖ 突然パートナーがこの世からいなくなる！何も語らないで消える！こういう事態は世間では少なくないと思う。残されたものはなくなった者へどんなにかわりを持ち乍ら生きるのだろう。生きることは大変なこと、そのことには他者を想うことの存在が大切になってくる。これは残された者の永いかかわりを求め続けることではないのだろうか。(YA)
- ❖ 小説を読むと言う感覚ではなく、ドラマか映画を見ると言う気がします。作家は映画監督ですので場面々が生き生きとしています。結論としていつも何か言い訳をしている自分、言い訳は必要なのか考えさせられます。(K)
- ❖ 人間の人生の中で相手の死を通して、解決不能の孤独や、絶望に寄り添えるか？誰にも避けて通れない。人間とは永い言い訳をしながら、期待したり、ガッカリしたりしながら。自分の人生を分かり合えないまま終わるまで続けるね。(M)
- ❖ 「長い」と「永い」の違いについて考えることから始まった読書でした。「永い言い訳」ですから、突然に家族を失った作家である幸夫が(自分中心ではあるが)孤独感を感じながら妻の夏子に対する言い訳をし自分自身を癒していつている。知り合った自分と同様の家族に対する行為も自分を癒すことにしかかかっていないと思う。(E子)
- ❖ 主人公津村は愛人をつくりながら亡くなった妻の生きていた頃の人間関係をたぐっていく。妻を愛していなかったことを言い訳している。身近な人を愛することは難しいことだと感じた。(TK)
- ❖ 広島では一段とネームバリューのある衣笠祥雄と同名の主人公。事故で亡くなった妻の携帯に残った〈もう愛していない。ひとかけらも〉の発信されなかったメール。浮ついた小説家がその後どうやって、子供の王様「アンコントロールラフルなぼく」を脱皮して成長

するのか、愛を学ぶのか、自己満足でない本当の愛情を他に与えられるのか。(N2)

- ❖ 我中心で物を見ると、すべてが言い訳になるが、人は言い訳をしながら生きていくものなのかもしれない。どんなに愛しても一人一人は孤独なもので、誰も寄り添えない、分かり合えない部分がある。しかし、文中の「他者のないところに人生は存在しない。人生は他者だ」という言葉が心に響いた。(Y)
- ❖ 不倫相手を家につれこむような幸夫。妻の事故死により、いろいろ体験をし、妻への愛をとりもどしてゆく、永い言い訳。おわりの妻への文章にぐっときた。やっと泣けてよかった。(KT)

『永い言い訳』を読んで

主人公、衣笠幸夫=津村啓は確かに作家だと思った。読んでいるとふと太宰治を思い浮かべてしまう。奥さんに支えられ、感謝しつつもそのことが重荷で、その呪縛から逃げるように不倫をしている。自分のさもしい心に気付きつつ、目を逸らせれば楽なのに、逸らすことができず、葛藤している。そんな自分がおぞましくて、吐き出すように文章を綴っている。書きたいんじゃなくて、書かずに生きていけない種類の人間、それが津村啓という作家だと思った。

とてもとても繊細な男なのだ。

そんな彼の妻夏子が友人との旅行中、バス事故で突然亡くなる。成り行きで夏子の友人、大宮ゆきの子供たち?小学6年生の真平と四歳の灯?との留守番を引き受けるのだが、それは半ば死んだような幸夫の居場所となり、頼りにされることの喜びを感じて徐々に生き返ってくるような微笑ましい描写が続く。

しかし幸夫を取り巻く人々の視点から眺めると、見方は変わる。自分勝手な幸夫の姿が浮かび上がってくる。

裏を返せば、頼りにされることの喜びは、支配欲と紙一重であるし、「子供を愛することって、これまで自分がやってきたどんな疾しいことだって夢みたくに忘れさせてくれる」ことだとマネージャーらしき人物は言う。つまりは逃げているだけなのだ。「もう愛していない。ひとかけらも」という謎のメッセージを自分の携帯に残した妻の当時の思いから。妻が死んだとき、不倫していた疚しさから。

しかし、一方で私はこうも思う。理由なんてどうでもいい。どんな自分勝手な行為であったとしても、子供たちには関係ない。それぞれが、それぞれの求めるもののために、懸命に行っている行為に、良い悪いがあるものか。側にいてほしいと思うときにそばにいて、助けてほしいと思うときに手をさしのべてくれる。それが自己愛だろうが、そんなことはどうで

もいいのだ、とも。ただし、関わったからには、勝手にポイ捨てることは許されない。愛したものには、その責任があるのだ。

誰かから愛されることは重要だけれども、人は愛することをしないと、相手の愛にも気がつかないような気がする。大宮一家の愛を求め、得て、感じて、幸夫は初めて、妻の自分に対する愛と、自分の残酷さに気がつくのだから。

「時間には限りがあるということ、人は後悔する生き物だということのを頭の芯から理解しているはずなのに、最も身近な人間に、誠意を欠いてしまうのは、どういうわけなのだろう」
その通りだなと思った。身近な家族に対して、人は時に最も厳しく、残酷だ。

大切に思っているはずなのに。

著者の西川氏は、映画監督であり、この本も映画のために書いたようであるが、そのためか、心理描写が細かく書かれていると思った。物語はおもしろく、時に鋭い指摘は、私の心を突き刺さした。でもあえていうなら、書きすぎているような気がして、それが少々残念に思った。映画化し、上映されたものを私は見ていないが、きっと映像では心理的な余韻がふんだんに表現されているのだろう。読み手にも、もっと余白を与えてほしいと思った。幸夫の行動からその心を探る道筋を示すような、色気のある文章が読みたいと思った。そうすれば、直木賞候補ではなく、芥川賞候補になったのでは？あくまでも私の勝手な見解だが。

この物語での、「永い言い訳」とは何なのだろうかと思った。死んだ人を思いだし、話しかけ、自分がひとり生き続ける為の、原動力みたいなものなのか。幸夫の場合は後悔か…。

ふりかえれば、私も言い訳をしながら、日々生きているなと思った。何かが出来ないこととか、行けない理由とか、やってしまった失敗とか…。生きることは言い訳し続けることなのかも…と思うとちょっとウンザリする反面、きっとみんな同じだな?と思い、ちょっとほっとしたりもする。

妻を失う前と、失った後の、津村啓の小説を読み比べてみたいと思った。(C)

主人公は作家と芸能人であり、妻は夫と距離を感じている。

芸能人なのに～だ。作家なのに～だ。と感じている身内。

その妻が亡くなって、周囲が奥様が亡くなったから～だと決めつけられて苦悩してもいる。

妻の死後の妻の友人関係とかかわり、妻を知ることになる。

こうあるべきなのにそうでないことは多く、その中で人間は孤独を感じてしまっている。今、発達障害の人も多く、家族ですら理解しにくい。今の世の中である。(TK)

<もう愛していない。ひとかけらも。>

亡くなった妻夏子の携帯電話の未送信ボックスに入っていたメールの言葉。夫はのけぞっ

た。私は思わず「夏子さん貴方はどこまで本気でこう想い、裏腹にどこまで本気で関係を修復したかったの？辛かったですよ。」と語りかけた。

作家・津村啓（本名：衣笠幸夫）は冷めた関係になっていた妻を突然のバス事故で失う。幸夫は妻の死に涙を流すことさえできなかった。同じ事故で愛妻（夏子の親友）を失い、あふれ出る悲しみや怒りを露わにする大宮陽一とは対照的だった。ただ幸夫が悪人かというとは決してそうではなく、自分勝手に薄情で自分が大好きなだけなのだ。結果として他人との関係はうまく築かれず、好かれもしない。がもしかするとどこにもいる存在なのかもしれない。程度の差こそあれ夏子にも多くの人にも共通するところであろう。

幸夫は小説家として食べていけなかった時代、妻夏子に支えてもらった。経済的にも精神的にも作家としても。作品としての出来栄えにも編集者の先に行くほどの助言をする。その結果、幸夫の心に芽生えたのは感謝ではなく、「妻はえらい人です」に表現されるほど自尊心を傷つけられた果ての「関係遮断」だった。

一方夏子も夫が作家として成功するにつれ、妬いていく。彼の仕事は「虚業」であり、自分の仕事は「労働」であると自負する。言葉にして口から出さなくても侮蔑の想いは伝わる。こうして二人は夫婦としての関係性を難しくしていった。気が付いた時には修復不可能で、どうしてこんな結果になったのかと途方に暮れる。誰とも分かち合えぬ、鉛のように、光のない目の色をして。

そうなる自分を正当化し、自分の価値観で相手を責め、相手に言い訳を続けるしかなくなる。人の心は難儀なものである。

作家西川は人の心の動きを微に入り細に入り見事に描ききる。時には肯定的な見方をする言葉で、時には懐疑的でシリカルな見方をする言葉で。この緊張感はずごい。私はシリカルな言葉に時おり辟易しながらも、作品の世界に引き込まれる。

また語り手が次々と入れ替わり、それぞれの人物の視点から物語を照らし出すことで、事実は揺れ動き、さらに引き込まれる。

「愛するべき日々愛することを怠ったことの代償は小さくない。」

幸夫が突然亡くなった夏子に対して自省する言葉だが、夏子へのお詫びともとれる。人の心は移ろいやすい。ましてや他人との関係はもっと移ろいやすい。そして今愛していることや愛されていることが永久だと勘違いする。愛する人だから言葉にしなくても分かり合えると勘違いする。一度ボタンを掛け違えたら心のすれ違いは、哀しいかなどこまでも続く。

移ろいやすい人の心だからこそ、共に生きている時に心を柔らかくし言葉を選び行動を尽くした努力によって関係を築き上げ続けなければいけない。

幸夫がそう気付いたのは、心の奥底で愛し続けた夏子が突然亡くなり、大宮家の陽一・真平・灯と出会い、凶らずも居場所を見つけた時だった。心を覆っていた硬いものが徐々に崩れていく。

状況が変化するなかで、幸夫はもう一度筆を執る。作品は美談に収まり空虚を散りばませた言葉ではなく、生き残った者として生きる葛藤を描いたものである。幸夫は意識の上でも再び夏子を愛し始める。

幸夫さん、貴方は今どんな色の目をしていますか？

夏子さん、幸夫さんとの関係は修復できそうですか？(S)

◆ 12月課題本 ◆

『黄色い皇帝』

芝木 好子／著 文芸春秋

〈谷底から蝶が一匹舞い上がってきた。大きな翅を振って上ってくるのをみると、黒い蝶の胴の左右に大きく黄色い弧が描いてあって、そのふちをグリーンで彩った、すごく強烈な蝶だった。頭は尖って、後翅にぎざぎざのある、凄い奴だった。〉

ネパールの山に分け入り、身を乗り出すと谷底も見えないほどの濃い霧の中で、思わず〈黄色い皇帝！〉と叫ぶほどの妖蝶テングアゲハの新種に出会った主人公、伊能隆一が、捕らえることの出来なかった垂涎の蝶をこのように表現している。ネパールの森林に、世界的に珍しいカトマンズ・アゲハを追って入り込んだときのことだ。題名〈黄色い皇帝〉とは、この新種の蝶のことだったのだ。

これまで 蝶にかかわったことはないし、標本もどちらかというともまじまじと見たいとは思ったことがない。私は山の中に住んでいるので、大きな蛾に出会ってギョッとすることも多く、あの肢体をのぞき込む気にはなれない。蝶と蛾は、同じ仲間とされるそうだが、蛾に親近感を持ったことはない。

ところが、芝木好子の筆にかかるると、蝶の姿がまるで変わる。

『黄色い皇帝』に出てくるカタカナ名前の蝶たちは、それぞれに個性豊かな美しい斑紋の描写で、アケボノアゲハの紅色など贈り物にされてもうれしいに違いない。やはり、あらためて実物の蝶におめにかかるほかはないだろうと、蝶にも詳しい竹原書院図書館の館長様にレクチャーを依頼した。

持ち込んでくださった標本箱には様々な科名が記され、初めて見るような蝶もたくさんらんでいた。標本箱には国内の蝶が居るだけだといわれたが、アゲハチョウの翅の美しさは、青だの緑だのと単純な色では説明できない。「わあ、きれい」そう言うしかなかった。

写真を使わないで蝶の姿を文章にした芝木好子の筆にも感嘆した。

標本の作り方や文中に出てくる道具なども、詳しく説明してくださった。

実物とは言いながら、標本は生きては居ない。本文中にも何度か出てきた蝶の最期の瞬間を司る指が、どうも受け入れられないのだけれど、そういう私は、他の生き物の最期の瞬間を誰かに託してその恩恵を被って生きているのだから、いのちある者の宿命を観ていくしかない。館長様も、子どもたちに見せる分しか捕っていないと言われていた。

この作品は、蝶の生態記録ではないのに記述が詳しい。芝木好子が、鱗翅学者である五十嵐邁氏の指導を仰ぎ、しかも自分でも蝶にのめり込んで作品を書いたからのようだ。〈あとがき〉によるとネパールまで飛んだりして1年4ヶ月他の仕事も手につかず蝶に明け暮れたという。五十嵐氏は、この作品のモデルだとも言われている。

蝶がそれほど魅力あるものなら、5歳の時から30歳のここまで25年の間、蝶に捕らえられている主人公伊能隆一を魅了するほどの人間は、周囲には限られてくる。肉親や蝶の仲間は当然として、外界から触れてくる女性は、蝶に勝る魅力を具えていなければならない。作者は、そこに二人の女性を配した。

蝶を追う空気に馴染み、隆一を崇拜する少年、松宮 洋の母である松宮貴子と、美術出版社につとめる榊萬里子である。

〈整然と並ぶ蝶は肢体に、生物の標本の虚しい美しか見せていない〉と思うし、〈なぜ形骸をよろこぶのだろう〉と標本をながめる萬里子だから、蝶に魅入られた隆一を振り向かせるのは無理だろうと、早くから思わせる。隆一の蝶の蒐集に大して〈人を幻惑するものにおぼれる幼児性や、アブノーマルな底なしの執念〉をみるのだから、その目は冷静である。自尊心の意地もあって貴子と張り合うが、38歳の自然体をまとう貴子には追いつかない。

一方、伊能隆一が貴子に対して持つ感情は、古い言葉ながら「懸想」という漢字を思い起こさせる。すぐに生物的に男女が求めあう小説や世相表現の多い最近では、なにやら古めかしい。作者が大正3年生まれだからといって、古色蒼然たる言葉の世界に引きずり込んで申し訳ないが、“想いを懸ける”と言いたくなるくらいゆっくりと情が育っていく。対する貴子も、清楚な風情でしなやかに立っている。やわらかで、倒れそうでいながら激情から身をかかわしていく。この二人の間を、蝶が、切れない糸のように繋いでいるので、距離があっても冷たさを感じない。隆一と貴子の間は、熟成していくお酒の樽ただ一つを見る気分で読んだ。

貴子と萬里子が鮮やかな対比で解りやすいが、作者の手法が読み手に見えるようで、隆一の人間的な迷いや動揺が少々軽く感じられる。蝶の魅力に埋まり込んだ隆一には、強引とも言える萬里子は重荷になるだろうと予想され、葛藤や選択の迷いをさっさと打ち消した感じだから、読みやすい安心感はあるが、恋愛の波乱のおもしろさはない。

〈土もやわらいで、白梅の真盛りの花びらが地面にこぼれる。花が咲き、昆虫が頭をもたげる季節の喜び〉を感じる貴子の様子を描く作者は、人間関係のしがらみや嫉妬を深くは追って行かない。貴子には夫が有り、洋も含めて家族3人の関係を詳らかにしようとすると、別の小説に仕立てなければならないし、倫理観も裁かねばなくなる。だが、題名のように、アゲハチョウが作品の魅力を吸い取って膨らんでいく。

地上の約束事を霧の底に沈めて、魂を虜にする「蝶」を持つことが人にはあるだろう。蝶の捕捉を試みて足を踏み外し、カトマンズの谷に横たわる隆一は蝶を抱いていた。

水を含んだ筆でなぞられた水彩画のように人物の存在は薄く、景色の中を飛ぶ「蝶」だけがはっきりと色彩を得て大きく生き生きと見える。心奪う「蝶」を持つ者。

今、手許に他の会のテキストである『思考の整理学』（外山滋比古著 筑摩書房）がある。その中に、「現実には二つある」という文が出てきた。こちらでも30年ほど前の著書だが、眼前の物理的現実ともう一つの現実があると整理すれば、本、特に文学作品を読むというのは、二つの現実を自分のものにするのだと言ってもいいのかもしれない。

自然の中を舞う蝶と、御しがたい心の中を舞う「蝶」と。共に、自分と分かちがたい現実なのだと言点するしかない。

講師 吉川 五百枝

◆ 三行感想 ～ 会を閉じて忘れぬうちに ～

- ❖ 蝶に魅せられた一人の男性が蝶好きな高校生の洋君に出会い、さまざまな人間模様を“蝶”という世界の中に見事に表現していた。隆一をとりまく2人の女性もまた、“蝶”ではなかったかと思う。とてもいい言葉で文章にひき込まれました。最後が少し納得のいかな終わり方だったのも...いつまでもこの物語を思い出すものになるのかと思いました。(R子)
- ❖ 作家さんが“一冊を書き終えて、これで言葉は自分のものになった。”を読んで、人間世界の生活で疲れてくると、私も蝶の様になって飛んで行き、なりたい自分は何だったのかと妄想する。(M)
- ❖ 蝶にとりつかれて次第に深入りし、蝶が総てになってしまった主人公だが、私には蝶の魅力が理解できなかった。しかし、今日、読書会で実際に蝶の標本を沢山見せて頂き、館長さんが採集されているお話なども聴かせて頂き、その魅力が少し理解できるような気がした。読書会を通していろいろな世界に目を開かせて頂き、おもしろいと思う分野が広がってきていることがありがたいと思った。(Y)
- ❖ 素敵、面白い、私はこの小説大好き。蝶にのめりこんだ主人公、彼をとりまく二人の女性の心理描写のすごさ。ゆったりと流れる時間！作家の力量がいやおうなくとわれてます。のめり込んでください。蝶の世界に！ネットで蝶の美しさを調べるのも一興か？(K)
- ❖ 趣味として未知のものに夢中になれるものがあると、きっと人生が豊かになるに違いない。主人公隆一は幻の蝶を追い求め、高校生洋の家族を巻き込み乍ら、とても巧みな文章と豊富な語彙で読む人を魅了しながら進む。蝶仲間や洋の両親のことなど活き活きと表現され、最初からおわりまで文章力がとても印象的な物語である。ストーリー性としても非常に興味深く、退屈せずに読破できる。(YA)
- ❖ 蝶にこんなに夢中になる人がいるのかと感心させられたが、作家の言葉の豊富さと美しさに心を奪われました。昔のDVDがあったらみてみたい。(TK)
- ❖ 今日の読書会は最初にMr. 館長の蝶のコレクションとお話を伺ってさらに蝶に深く入

り込んで行く主人公の行動がさらに良く理解出来ました。趣味を超えて人生を左右するほど何かのにめり込むのも素晴らしい事だどつくづくうらやましい。(N2)

- ❖ きれいな蝶の標本、展翅の道具、採集の網等の説明、見学に感激した。テングアゲハに魅せられた隆一と少年洋の物語。洋の母親との恋愛と感じ方がそれぞれ違っておもしろかった。ストーリーの最後も気になった。生か死か。(KT)

『黄色い皇帝』を読んで

12月の課題本暑い夏、盆に読んでいます。なかなか集中して読めませんが一生懸命に読みました。

昭和51年頃に書いた作品なのですね。はるか昔、蝶にとりつかれた主人公、少し前では昆虫カブトムシが話題で百貨店で何十万円も出して買うとニュースになっていましたが、買う人と、捕まえる側の人と二通りありますね。

蝶は、捕る方の方が多いいコレクター憑かれるがごとくとなった人が多いと思います。時代によって流行がありますね。山にとりつかれた・今はアニメーションとか人それぞれですから非難は出来ませんが、周りの者は家族は大変なことでしょう。ましてや外国まで探しに行くとなると金と暇がかかりますね。自分は思いをかなえればこの上ない幸せなことですが。

この本を読んで作者は、よく蝶のことを調べているよねと思いながら読んでいました。あとがきを見て、作者自身が深入りし、ネパールやカトマンズまで行き一年四カ月も他の仕事はなにも手につかない生活をしていたと。

主人公＝作者だったのですね。一体単射だからそうなのかと納得でした。

平成の今、テレビを見ていて、昆虫に、とりつかれた男性、南方の(山尾に?)入り昆虫をつかまえ、売りビジネスにしているのをみて、金にかえる人生甲斐とする人それぞれの人生なのだと思いました。(M子)

読み終えてとても印象的だったのが語彙の豊かさと会話を含めた巧みな表現。黄色い皇帝と呼ばれる幻の蝶を追い求める隆一。蝶を通して知り合う高校生の少年洋と、その両親。隆一との確執がある真理子。隆一を取り巻く蝶仲間を中心に読者の興味をそそる内容で話は展開する。

登場人物は一人一人が個性的に描かれ、その人間性、内面性まで理解出来るような巧みな表現。中でも洋と真理子の存在は際立っている。

テングアゲハやカトマンズアゲハ等写真を見れば何と美しい蝶なんだろうと思う。誰しも自分の目で飛んでいるのを見たくなるに違いない。隆一と洋の蝶を媒介とした生活が、洋の母貴子と隆一の結末を暗示させているようだ。

洋が約束を果たさなかった時の隆一の感情に同情したり、反対に洋の判断を正当化したり、作者の人間の内面に迫る表現に魅了された。

一人でカトマンズの山に幻の蝶を追い求める隆一の姿は鬼気迫るものが漂っていたのではないだろうか。今回の読書会では館長さんの収集された沢山の蝶を見ることが出来、又、蝶にまつわる色々な興味ある話を聞いて楽しい一時でした。(YA)

蝶を追い求めるために、人や家族をふりまわしている主人公だが、蝶の友達のお母さんまで気をひいてしまうことになる。それをはた目に見て、主人公と結婚をしたくなる他の女性。

人間は夢中になって人をふりまわしたり、うまくいきそうな男女の関係をわざとちょっかいを出してこわそうとしたくなるようだ。蝶のコレクターの中でも、他の人が貴重な種類の蝶を手に入れたとなると、むきになって、それを自分の手元にもらおうとしている。

人間が何かに夢中になるだけでなく、それによっていつの間にか支配されていることがよくわかる。(TK)

蝶の魅力に心奪われた30歳の地質技師伊能隆一。同じ様に蝶に魅了された高校生の少年松宮洋。そして息子の夢を我が夢とし共に人生を歩もうとする母貴子。

隆一を蝶の研究者として心酔する洋と隆一の師弟関係。蝶の研究に打ち込む息子を温かく見守る母貴子と隆一の恋愛関係。この関係の間を東京近郊やネパール・カトマンズの山中に棲息する美しい蝶が華麗に飛び回る。すると三人の心模様が蝶の舞うはばたきのように揺れ動き、幻の蝶「黄色い皇帝」へと誘い、作者の筆致と相まっていつしか作品を妖艶なものにしていく。

隆一は叔父の紹介で榊万里子と知り合う。彼は結婚を望んでいないのに告げようとせず、彼女から付き合いを断ってくれることを望む。貴子に対しても、夫の不貞を知り体調を崩し精神的にも奈落に落とされたような時に、恋愛感情を露わにする。「早く一緒になろう。いいね」と。何故か卑怯な部分を感じてしまう。隆一は貴子に何を求めているのだろうか。

隆一を師として仰ぐ洋に対しても、蝶のことならきめ細かく世話をするのに、貴子への恋愛感情を言葉にのせて洋に説明することなく、一家のアメリカ移住に対して「ニューヨークかカトマンズか、二者択一だ」と迫る。乱暴ではないか。当然洋は大きく動揺する。悪くすると二人と断絶になる可能性だってあるではないか。

貴子の「私には洋がいるわ。時々こうしていられればうれしい。」と隆一に言った言葉

も、自分がどうしたいかというより母として息子の夢の実現のために自分の人生を捧げているかのようである。そういう時代であったかもしれない。また、不倫しその相手との間に子供までつくっても謝ろうともしない夫義高に対して手紙で離婚しようと告げるが、離婚どころかアメリカ行きを勝手に決められてしまう。理不尽この上ない。

義高は洋と貴子が蝶に関わることを何の役にも立たないと蔑む。そして己の家族への裏切りを謝罪するどころか、亭主である自分が家族3人でのアメリカ行きを決めたのだから家族は従うべきと決めつける。もしかすると内心詫びていても言葉にすることを得意としないから口にしないだけなのか。義高はアメリカ在住2年間で3人の関係は元に戻ると都合よく考え楽観視するが、貴子は決して義高を許さず息子洋が独立したら離婚するだろう。義高は人生に何を求めているのだろうか。

彼のように欺瞞的な考えの男性を昔テレビ番組の中でよく観たなど回想する。作品が発表されたのは1976年だから今から約40年前だ。人生に求めるものが個によって違うのは当然だが、時代によって女性も男性も大きく異なることをまざまざと痛感する。

再々度訪れたネパールでひとり隆一は、山中の幽谷から舞い上がった幻の蝶を見た。大きな黒翅に黄の紋章を貼り付け緑で縁取った蝶「黄色い皇帝」はテングと呼ぶに相応しい頭部を突き立て、気流に乗ってぐんぐん上がってきた。隆一はこの幻の蝶を洋や貴子と一緒に観たかった。蝶をネットに入れた瞬間、彼は足を踏み外し、今彼は怪我をしたまま、崖の途中にいる。読者に余韻を残しながら小説は終わる。

私は大自然の中で、生きる喜びをはばたかせる蝶が好きだ。そんな私に「ネパール・カトマンズに行きたい！」と想わせる罪作りな小説であった。モデルは五十嵐邁という昆虫学者であるという。

作家芝木好子さんが、知っているようで知らない蝶を題材にし、構成に工夫を凝らし、古くからの美しい日本語で紡いでいることに感服する。作家って本当に素晴らしい。 (S)

◆ 1月課題本 ◆
『光抱く友よ』
高樹のぶ子／著 新潮社

1984年に芥川賞を得て、その年、新潮社から『光抱く友よ』は出版された。

高校生二人が主人公の友情物語として読み流していたが、その後2004年に、他の読書会でもう一度読み直すことになった。今回で14年ぶり3度目の出会いとなる。

2004年にこの作品と出会ったとき、これは単なる友情物語ではなく、作者の懐の深さを示す文学作品であると気がついた。その20年間が経過する間に、私は自分の目を開いてくれる1冊の子供の本に出会ったのだ。

『パノラマ大宇宙こども惑星の旅』（画・文 岩崎賀都彰 1990年 平凡社）である。そして、たまたま、伊豆高原にある「岩崎一彰・宇宙美術館」をふらっと尋ねる縁もあって『光抱く友よ』は、友情物語にとどまらない視点の変革をもたらす揺さぶりの作品となった。

まるでカメラで写し取ったような宇宙風景が並んでいる美術館で、各原画には横にルーペがぶらさげてあり、写真ではなく、描かれたものだと解るようになっている。

『光抱く友よ』のもう一人の主人公である松尾勝美の部屋にあったあの30枚もの宇宙画がそこにあった。

スペース・アーティストと言われる岩崎賀都彰の原画は、現在人間が行くことも出来ず、宇宙望遠鏡でも写真に撮ることも出来ない位置から見た宇宙風景が描かれている。

〈こっちはね、木星を衛星イオから見たところ〉と勝美が説明する絵は、たしかに、『パノラマ大宇宙こども惑星の旅』に使われている1枚である。木星を地球上から見る事はできるが、衛星イオの位置から木星を見る事はできない。様々な研究や観察の結果から岩崎が想像して描いた風景画である。

この見る事のできない位置の木星にも惹かれたが、一番私を空中に放り上げたのは、『パノラマ』の次のページに展開する土星の風景だった。リングを持った土星は、地球上や宇宙望遠鏡でとらえられてよく目にする。つばのある帽子のようなスタイルはおなじみだ。ところが 岩崎は、そのリングが垂直に見える位置から描いた。地球からではなく、土星の衛星テチスの赤道付近から見ると、リングは垂直に立っているように見えるようだ。

この子供向けという本は、私の世界観に衝撃を与えてくれた。

土星のリングは、帽子のふちのような形をしていると思い込んでいたのに、見る位置によつては垂直なのだ。私が、これしかないと思っていることのなんという危うさか。

高樹のぶ子は、いつか、このスペースアーティストの作品群に出会ったに違いない。そして、私が驚かされたように、きっと驚いて息をのんだことだろう。

松尾勝美という少女と、相馬涼子という少女と、この二人の高校生を誕生させ、二人の世界の違いを、宇宙画の世界と天体望遠鏡で見る世界の違いとして書き表したに違いない。

作者の家庭環境は、代々教育者が続いているそうだから、あまり世間の物差しからはずれることなく、無難な世界に馴染んできたと思える。主となる登場人物、相馬涼子は、この作者のよく知る世界の住人として振る舞う。涼子の父は大学教授であるし、専門の話もしてくれるような父親ぶりである。涼子自身も、学校生活はそれなりの位置を守ることができ、不安定な要素は無い。

一方の松尾勝美は、借金を重ねた末2歳の自分を捨てた父、病身で飲んだくれの母、こういう二人を両親とする生い立ちだ。

涼子には、勝美が理解できなかつただろう。

勝美の部屋を飾る宇宙風景画を見て、勝美は天体が好きなのだろうからと、父親の持ち帰った天体望遠鏡を見せようとする涼子の行為が描かれて、二人の違いが明らかになる。勝美は、天体に興味があつたのではなく、地球上に足場を持たぬ不安定さ、浮遊感、底なしの闇に向う危なっかしさなどに心が共鳴したに過ぎない。

〈音も光も届かない場所を漂っている感じ〉

〈人間はとことん無力だと思えてくる。〉

〈自分の力が本当に何もないんだって。チリかゴミみたいなもの。真実在るもんを、この目で見るのが出来んわけよ〉勝美が浸っているらしい宇宙風景画から漂ってくるこれらの感覚を、涼子の言葉にしたところで涼子は勝美を通してしか自分に馴染ませることはできなかった。

だから涼子は、自分とは違う勝美の大人びて疲れを溜めながらも凜としたところにあこがれた。勝美が涼子の胸の片隅に持ち込んだ〈ものがなく、どうにもやりきれないがらんがらんの風穴〉が、涼子のこじんまりと整った世界を押し広げることになった。

〈これまで17年間、うちの心がきちんと片づいとったところをひっくり返したんよ。〉それが涼子にとって勝美の存在の仕方だった。信じて立っていた大地が、勝美の属する世界によって、浮遊する感覚となる。

〈そうか。ああいう友達は大変にするんだな〉という涼子の父親のセリフが良い。自分が確かめるまでわからんことはわからんままにしておけという父親に相応しい言葉だ。疑念を黒白きめつけないで大事にしておけという意味と受け取れば、それは 作者の意識そのものだ。

「人は黒でもなく白でもなく誰でもが灰色で、しかも変わりゆく不完全ないきもの」(毎日新聞コラム) という人間観を、作者は文学がかろうじてささえていると考えている。

涼子にとって勝美は、自分では触れない闇を照らす光であったろうし、勝美にとっても涼子は同じ意味で光であったろう。人間にとって、闇と光は対立するものではなく、固定したものでもない。光はいつでも闇になり、闇はいつでも光となる。

今回は、私は涼子より勝美に近付いたように思う。お互いが光を抱く友だ。生きる道は異なろうと、〈深さを測ることの出来ない夜空に、星のまたたきひとつ探し出せなかった〉という最終行に、私は光を見る。それぞれが、瞬く星が見えぬ暗夜でも、星が光を放っていることを知ればこそ探そうとするのだ。見えなくても、星の光を知っていれば光は在る。心に見える星は在る。その星を友と言うのもいいではないか。

講師 吉川 五百枝

◆ 三行感想 ～ 会を閉じて忘れぬうちに ～

- ❖ 人間は誰しもその身に「光」を抱いているのではないだろうか。そのことを宇宙を見つめることから見させてくれた高樹のぶ子さんのペンの力に感動しました。(E子)
- ❖ 作家さんの発想のすごさ。若い時から何を考え行動されて、作品にされてこられたのか。別の本を読みたいと心から思いました。思い込みを変える事の大変さと問題のとらえ方と解決の仕方が変わりそうです。(M)
- ❖ 光に合わない欠けているものに気がつかない。欠けているものを見せてくれるのが光。いつも地球側からの視点でなく、衛星から木星をみるかの如く。立ち位置が変われば全く違う見方になるということが書かれていたと理解した。(Y)
- ❖ 作者の真意を理解するのは難しいかもしれませんが、内容を熟読すると、なかなか奥の深い小説です。漢字の使い方が素晴らしい！でもそれに気をとられていると前になかなか進めません。芥川賞です。短編です。是非是非おススメです。(K子)
- ❖ 読書会で話を聞いて考えも少し深くなった。対比的な二人の女子高生勝美と涼子を通してどのような生き方をすべきなのか。環境のきびしい勝美親子の懸命な生き方に裕福な涼子が勝手にほのかな光を思い、自分でも気づかないだろうけど、光が降りそそいでいるのではないだろうか。先生のお話に魅入られた。(YA)
- ❖ 主人公は三島を尊敬していたが、不良の松尾に関心を持つ。人はそれぞれの立場、場所で、一生懸命生きていて、それぞれいい所や光があると感じた。(TK)
皆から不良少女と思われている松尾と優等生の涼子の交流と別れがきれいな文章で書かれていて、スムーズに読めた。宇宙画にストーリーの重要な役割があるとは思わなかった。皆さんの感想を聞きながらストーリーの表面しかみえていないことを痛感し、でも、これが読書会の楽しみだと思った。(KT)

- ❖ 自分で読んだ時は、文章の表面しかみることができなかつたのが、話を聞いているうちに本の本質、自分の欠けている所をおしえてくれているのが友達だということが思いあつた事がありました。(Kくん)

『光抱く友よ』を読んで

生活環境の全く違う二人の女子高校生、相馬涼子と松尾勝美。松尾が教師の三島に叩かれているところを目撃したことで、二人は接点を持つ。淡い憧れを抱いていた三島の態度に、軽蔑と怒りを覚える涼子。涼子の変化は大人への入口に立ったということかとも思ったが、本当の(?)大人は、そんな三島の態度に動揺したりはしないな、とも思った。ああ、人間なんてそんなもの、と思うだけのような気がする。涼子の純粋さは、無知の純粋さなのだと思う。松尾と少し親しくなり、自分とは異なる家庭環境に戸惑い、その事実をどうやって自分の価値観の中に取り込めれば良いのか、右往左往している涼子。その姿は何となく歯痒く、かつて自分もそのようなことがあつたような気がする。

アルコール依存症の母親との荒れた生活、母子関係の複雑さを見せられた後で、涼子は星の好きな勝美を自宅へ招き、無理言って父親に用意させた望遠鏡で天体観測をする。勝美が喜ぶだろうと思って行ったのに、勝美の態度に腹を立て、自分の失望だけを言い放つてしまふ涼子。その行為、無知故の純粋さが、実は相手を追いつめていることに気がつかず、自分の罪深さにも気がつかず・・・若さは本当に残酷なものだと、つくづく感じる。若さとは言ったが、実は精神的な成熟度のようなもので、年齢とは関係がない。いくら歳をとつても、分からない人には分からない。

涼子が勝美を追いつめたその結果、二人の距離は再び離れてしまった。しかし、よく読んでみると涼子も勝美の存在に追いつめられていたのかもしれないなとも思った。「振りまわされるのは嫌だ、と涼子の方が妙に構えて松尾を見ると」、「追いかけているのは自分の方らしい、とふいに思われてきて立ちどまり、松尾を黙って見下した」。自分が勝美を追いかけている。そのことになぜ涼子は抵抗があるのか。涼子はどこか、勝美と自分の位置関係を気にしているからだと思う。どちらが相手に影響力を持つのか。そんなことが、自分の立ち位置を決める重要な指標なのだろう。

自分のことだけを悩み続ける涼子に対し、勝美は常に自分の周囲との関係に思い悩んでいる。アルコール依存の母親の存在にウンザリしながらも、大切な存在で、支えられるのは自分しかいない、と健気に日々を生き抜いている。

生活環境は違うが、手紙の件で助けてくれた涼子。「あんたにわかってもらおうとは思わんけど、人間には辛抱できる辛さと、できん辛さがあるんよね」と言い放ちながらも、涼子の存在は、勝美にとって、彼女ならこの痛みを少しでも分かち合ってもらえるかもしれないという淡い望みをもつたのだと思う。涼子が考えるよりも、涼子の存在は勝美にとって大き

なものだったのだ。だから、自分の内面ともいえる星の部屋を涼子に見せた。自分のことを分かって欲しくて。しかし涼子は見かけより幼かった。相手の立場に立って考える想像力がまだまだ育ってはいなかった。

「深さを測ることのできない夜空に、星のまたたきひとつ探し出せなかった」
という最後の文章が、私の心に哀しく響いた。(C)

価値観の多様化が言われて久しい。現在、価値観の相違で離別したり距離を置いて社会生活をしたりする人も多い。だがその違いを埋めようとしたら、こんなにも素晴らしく豊かにする出会いもあるのだと、読後の私は感動に浸っている。

主人公の相馬涼子と松尾勝美は、瀬戸内に面した市街地にある高校に通う女子高生。

しかし、二人の家庭環境は両極にある。

一方の相馬涼子は、大学教授の父と家庭的な母をもち、引っ込み思案である。またいわゆる“世間の常識”の中で育まれた価値観を身に付けている。その彼女が“松尾（作者は敢えて姓で表記）”と出会い、彼女の母親が書くべき手紙の代筆をしたり、彼女の部屋で宇宙画の話の聞いたり、自宅に招いて天体望遠鏡で星を見たりと、いっしょの時間を過ごしていく。

その中で、“松尾”のフローズンアイデンティティ（読書会で学びました）に触れ、松尾の存在が自分の心のがらんとした風穴をふさいでくれていることを自覚し、これまで培われた世間の常識的な価値観を粉々に壊し、自身で新たな価値観を見出そうとしている。涼子のこの様子がたまらなく愛おしい。結果として、恋に恋する乙女から、大人の女性として自身の価値観（人の見方）を築き上げていくほど成長した。だからこそ見えてき友“松尾”が抱いている「光」。

他方の松尾勝美は、幼い頃自ら失踪した父とアルコール依存症で精神的に不安定な母をもつ。母は生活のすべてを娘に依存している。母娘は場末の酒場を営んでいるが経済的にはかなり苦しい。身体的にも精神的にも早熟な“松尾”。人生の倦怠感すら漂わせている。中学校時代からひと月に一回は家出を繰り返している。その後米軍の米兵マーチンと付き合う。マーチンは星マニアで、教えてくれた宇宙画。松尾は涼子に「木星を衛星イオから見たところ」と指さす。「視座を変えたらこんなにも見えるものが変わってくるのか!」と驚いた。吉川先生が『パノラマ大宇宙』を手で説明してくださっている所を、思わず撮影してしまったくらいだ。彼女は一貫して自分が築き上げてきた価値観(フローズンアイデンティティ)で、涼子も周りの人々も見ている。その姿は凛として媚びない。

本作品は両極にいる二人の女子高生が微妙な距離を保ち、緊張感を持ちながら淡い友情を重ねていく過程を描いているが、視座を変えたらその人もその人の価値観もこんなにも見えるものが違ってくるということを作者は言いたかったのではないだろうか。

決して綺麗ごとの「心の通い合う友」ではなく、距離を詰めるとお互いが傷つき合い、淡くも儚い友情に終わる二人の関係だが、けれど二人の心の一番深いところは一瞬確かに重なり響き合った相馬涼子と松尾勝美。だからこそ涼子は松尾に「光」を見出し、松尾も涼子に「光」を感じた。

涼子が見出した松尾にとっての「光」は、「愛すべき母親の尊厳と守るべき母親との暮らし」。

松尾が感じた涼子にとっての「光」は、「一人の女性としての成長」

作家高樹のぶ子さんは、何とも言葉に著しきれない想いや揺れ動く心の機微を言葉に置き換えるのがとても上手な人だなあと感服する。作家って本当に素晴らしい。 (S)

◆ 2月課題本 ◆

『ぶつかって ぶつかって』

竹下 義樹/著 かもがわ出版

「ぶつかっていく」という言葉は、挑戦していくことの象徴として使われることが多い。だが、全盲の人にとっては「象徴」ではなく、実体験する言葉なのだと、このたび感じ直した。

全盲の竹下氏が弁護士資格をとられたことは、その学生時代を支えた龍谷大学のニュースで知っていた。龍谷大学の法学部は1968年の開設で、彼の入学は1971年だから入学そのことも学部内では耳目を集めた。しかし、短い文面の龍谷ニュースからは、入学後の些細はわからず、10年後の「視力障害の弁護士誕生」という大ニュースに突然であうこととなった。

今年のテキストを選ぶとき、県立図書館の読書会用図書リストの中にこの竹下氏の著書を見つけて、読む縁が廻ってきた。書かれてからすでに30年が過ぎている。

1981年、日本で初めて盲人弁護士が誕生した。法務省へ出願を始めてから10年かかったそうだ。晴眼者（とよばれるそうだが）にとっての努力と、視力障害を持つ彼との努力とは違っていただろう。その努力は自分がしなければならないという行為としては同じであっても、自分を理解してもらふ事によって初めて自分の道を歩けるという点で大きく違っている。自分が何をしたいのかを、まず多数の周りの人に理解してもらふところから始まるのが彼の第一歩だった。

〈弁護士になりたいという希望を持ち始めたのは事実。普通高校のみんなと同じように・・・〉〈普通高校のみんな（晴眼者）と同じように。〉という願いは、晴眼者とは違う希望であり、この願いをずっと持ち続けなければならなかったその後の歩みである。私自身、年々視力が衰え、スーパームーンであろうとも月がくつきり見えることがなくなったが、その私の目でも、光は見える。視力が全くない世界はどんなのだろう。視力を失った息子を、竹下氏の両親はどんなつらい思いで見っていたのだろう。

〈その失明を悲しみ嘆くよりも、現実として受け入れようと〉する母親の一途な行動が、つらさの裏側として想像できる。

「盲人にも弁護士の道を」彼の夢を表す言葉が、多くの人をその言葉の下に集めた。

事実上の司法試験点字受験を拒否されてから支援が広がる。竹下氏個人ではなく、視覚障害を持つ人の未来への支援となる視点がだんだん共有されてきたということだ。

〈いま助けを欲している人の気持ちを的確に捉えることの出来る人〉が弁護士だととらえていた彼が、〈弁護士になったらこれがしたい〉と言えるものを具体的に持つことが、〈晴眼者障害者の別無く〉必要なのだと書き進められる。何々になりたいという入り口からさらに進まなければならない。そして彼は、視覚障害者の問題を権利の問題として整理すること、重度の視覚障害があっても社会的責任の大きい仕事を全うする力が他の人の希望の力になること、を気付かされる。

ちょっと想像してみても、障害を持つ人に欠かせないのは、支援要員だ。ボランティア活動をしてくれた人は100人をくだらないと彼は言う。

自分が自分の状況や頼みを伝えなければ理解してもらえないと解った「個人」から、多くの支援者と共に生きていく「社会人」になっていく変化を具に描く。

視力障害のある者にも司法試験受験の道を開くこと、司法試験に合格すること、司法研修を済ませ弁護士になること、弁護士という職業分野をまっとうすること。

次々に夢を叶えていく彼の報告を読む。そして、支援者と共に、視覚障害のみならず、様々な障害を持つ人の人権を守る運動に盛り上げていった。障害があるからこそ解る法律で割り切れない事件を手がけ、社会保障、障害者問題の課題を解決していくことの希望が多くの支援者と共に膨らんでいく。彼は一人の夢をもつことからスタートしたが、多くの支援者と夢を共有するに至った。

竹下氏には、〈大きな声を出し、高らかに笑う楽天性があり議論好き〉という個性があり、昭和56年の合格、59年の弁護士合格につながっていく。多くの人の支援があったからには違いはないが、支援する人々が、義務感や同情心、善行意識、などで長い間支援し続けたのではないと思う。個人の問題が、普遍的な「生きにくい社会の打破」に繋がる問題であるから、名をあげて数えられる人、名も知らぬ数えられない人、そういう様々な人を繋いでいったのだろう。支えた人たちも、竹下氏の生き方からたくさんの励ましを貰ったに違いない。

制定されてから約2年になる「障害者差別解消法」だが、大学で障害学生の就労支援がことのほか進んでいるとは言えないようだ。特に、発達障害学生の就労は最近の難題であると指摘されている。ここにも、個人では解決できない自立就労の問題を、長期間のフォローや、学外との連携などを念頭に、広い支援体制を作って行こうという大学の試みが芽生えている。が、まだ緒についたばかりだ。

竹下氏個人の努力は、すばらしい。同時に、問題や知識の共有へと広がっていく支える仲間の力の大きさも感じる彼の物語だった。

竹原図書館の司書さんから前の会で紹介された関連本3冊を、会員3人が1冊ずつ読んできて、その記憶に残っていることを語ってくださったのも、心に響く時間となった。

講師 吉川 五百枝

◆ 三行感想 ～ 会を閉じて忘れぬうちに ～

- ❖ 全盲という想像を絶する過酷なハンディがあり、色々な壁にぶつかりながら十年の苦闘の末、弁護士として活躍するまでが悲愴感無く綴られている。法的なこと、精神的又物理的な強固な壁に阻まれ、周りの沢山の人々の支援を得て後に続く人の為に先駆者として血の滲み出るような試練、点字六法が五十数冊になるのが驚愕だった。(YA)
- ❖ 主人公は、ぶつかってから考える楽天的な人。点字をよむことさえ大変なのに、六法全書をよんでいる。想像のできない困難を感じた。本人の人柄ゆえにも、周りの人をまきこんで助け合っていることを感じた。(TK)
- ❖ 彼のことばが直球。人々から共感を得、大きな力となり、次の時代を作り出していける力を皆で共有される。運を作り、奇跡を起こせる。すごい本を読みました。(M)
- ❖ 素直な心の持ち主。目が見えなくなろうとしていても他人にはそのそぶりさえ見せない強い心の持ち主。盲者になって、さまざまなことにぶつかった時、まっすぐそのことに向き合うことが出来る人。読んだ後、そんなことが頭の中をぐるぐる回った。吉川先生から「ボランティア」を訳すと「お互いさま」ですよ。と教えていただき、この本の支援者の方々の思いが理解できました。とても心にひびく言葉でした。(R子)
- ❖ 困難があっても持ち前のねばりと楽天性で一步一步状況を切り開いていく事がすごい。友だちのように生きたいという妻もすばらしいと思った。(KT)
- ❖ まわりにたくさんの支援の輪ができるということは、彼自身の生き方に賛同した人がたくさんいるということだと思います。支援することは、彼自身のためのみならず、自分自身の喜び、生きがいにつながっているのだと思います。(T)
- ❖ 全盲で弁護士になられた竹下さんは、性格が直球の人なのだろう。まずやりたい事があると、すぐ走り出す。不可能という言葉は頭になく、ぶつかってはじめて方法を考える。それがまた彼の魅力であり、その人柄にひかれて沢山の人が協力してくれたのだが、協力してくれた人々もまた彼から得るものが多々だと思う。(N2)
- ❖ どれだけ多くの人々が彼のためにサポートしたのかと感動した。サポートした側の人々も逆に励まされるものがあつたからこそ継続して力を出すことができた気づかされた。むじゃ気にこうしたいとの希望が先にあり、それがどんなに困難かを考えず、壁にぶつかって ぶつかって初めて気がつく人。その楽天的な性格が幸いしたと思う。(Y)
- ❖ 世の中にはこの様な人がいるのです。やはり本はすごい、知る事ができるのです。その上この世は捨てたものでもない。協力者が山のように居るのです。晴眼者の私にも何かと言う思いがわいてきました。(K子)

- ❖ 一生懸命生きている姿が皆に共感され応援したくさせる。その姿から自分の生き方をふり返し、自分ができないのは努力がたらないと思い至り、がんばろうと思った。(KW)

『ぶつかって ぶつかって』を読んで

中途失明者である竹下義樹氏は「盲人にも弁護士の道を」をスローガンに、司法試験の点字受験を認めさせ、日本で初めて盲人で試験に合格し、弁護士になった人物である。その道のりは長く、試験が認められて合格するまで10年かかっている。しかも司法試験受験中に結婚、子どもも授かり、バイトで生活も支えながらの受験生活であった。決して勉強が好きだったわけでもなく、(法学部に入るまでも2年かかっている)、弁護士になりたいという動機も憧れからであるが、その夢をかなえ、弁護士として仕事をしている。すごいことだと思う。

しかし読んでいてさらに感動するのは、彼を支えた、名もなき人々の力に、である。長い時間をかけて諦めずに弁護士になれたのは、彼のある意味楽観的でひがまない性格、諦めない強さも大きな要素だとは思う。しかし何よりそんな彼を支え続けた多くの友人、ボランティア達の底力があってこそだと感じた。勉強のための膨大な専門書、資料、参考書、判例などを100人ものボランティアが彼のために点訳し、録音し、支え続けた。点字の本は200冊、録音テープは1000本になったという。彼も言う。「『竹下さんが一生懸命に頑張れば、私たちはどれだけでも本を作り続ける。私達の作った本で勉強して、それで受ければこんな素晴らしいことはない』。こんなみんなの気持ちで、手で触れる時、耳で聞く時、もう一つの言葉となって私を励まし続けてくれた」。

晴れて司法修習生となった後、全盲の彼の研修指導ができるかどうか、受け入れる京都の弁護士会や検察庁も不安があったようだが、「わからないから受け入れないというのではなく、どうしていいかわからなかったら、まず受け入れ、やってみて、その中で工夫をし、解決していこうという姿勢」であったという。今の社会は「わからないから排除する」の方向だけれども、当時の、人権を守り、法の番人である人達に温かいものを感じた。1988年に書かれたものだから、今の状況はどうかは分からないが。

題名の『ぶつかって、ぶつかって。』。彼は何にぶつかったというのだろう。受験の壁、世間の壁、自分自身?書ききれない、話しきれない苦労もたくさんしてきているのだろう。そのことはあえて書かず、だったのかもしれない。

点字は分からないけれど、思わず表紙の点字を何度もなぞった。(C)

副題「全盲の弁護士 竹下義樹」を見て驚いた。かつて高校の同級生が弁護士になるという夢を描いて司法試験に挑戦し続けた。しかし10回目も不合格になった時点で諦め会社員になった。彼は全盲ではない。全盲の竹下義樹さんはどんな試練を強いられ、どれだけ努力を重ねたのだろう。

ぶつかったのは？

竹下義樹さんは小さい時から弱視だった。中学3年の時、相撲部での稽古が原因で外傷性網膜剥離になり失明を宣告されてしまう。石川県立盲学校を卒業し、京都府立盲学校に編入学し、20歳で龍谷大学法学部に入学。卒業すれば弁護士になれると思っていた。

1971年法務省に問い合わせると、〈盲人の方の受験について事実上実施は不可能〉という返信。「そんなアホな！」と思わず叫んだ。ご本人の心中如何ばかりであったろう。文中にも〈一瞬、心が凍るような気がした〉とある。しかしその後の彼の行動がすごい。諦めないのだ。2回の法務省との交渉で、複数弁護士の助言や京大・東大法学部学生の支援をもらい、点字司法試験の実施における課題と解決策（本来は法務省の仕事）や諸外国の実践例を調査し提出した資料は50センチ以上あったという。彼がぶつかったのは法務省（“国”）で、障がい者の権利が守られていない70年代その門戸を開けさせた意義は大きいと私は武者震いする。

また彼を助け、一緒に資料を作り、一緒に考えてくれる仲間が「竹下義樹君を支援する会」を1972年発足した。朝日新聞の記者から「組織的な支援のある運動を」と言われたのが動機だった。彼がつかんだのは、“最強の仲間”と“組織的な運動”。

点字での司法試験実施を実現させ、司法試験に挑戦し続けた。その道のりも凄まじい。「難しいなら努力すればいい。ないのなら作ればいいだけの話」として少しもひるむことなく、支援者やボランティアの協力を得て、200もの点訳の参考書を作ってもらい、1000もの朗読テープを作ってもらった。9回の受験の末、超難関司法試験に合格を果たすことができた。30歳だった。半年の視察研修（ドイツとアメリカ）を終え、2年間の司法修習に入る。1984年竹下さん33歳で弁護士登録。

竹下弁護士が社会に与えた影響は？

調べ学習として小林照幸著『全盲の弁護士 竹下義樹』を読んだ。そこには竹下さんが弁護士として裁判を通して勝っても負けても、障がい者問題（障がい者の問題を権利として整理）や社会保障制度（生活保護受給等）の矛盾を是正し続ける姿があった。また90年代、当時最大暴力団「山口組総長」を相手に民事訴訟（損害賠償請求訴訟）を起こし最高裁で「使用者責任」を認めさせた。暴力団は時に家族の命さえ平気で奪う恐怖の塊である。

私から見ると彼の裁判は偉業である。その背景を思考したい。

一つ目は“論点整理”が的確だったことが挙げられる。彼は裁判の度に、原告の想いをじっくり聴き先輩・同僚弁護士や有識者に助言をもらうという。

二つ目は“仲間との社会運動”が挙げられる。本文に〈司法試験受験から弁護士の15年間いつも仲間が一緒だった。最高の妻、家族、「支援する会」の仲間、研修所での友人たち、

青法協の仲間、弁護士事務所のメンバー。運動を支えてくれた弁護士、障害者団体の人たち、ボランティアの人たち、サークルの仲間たち、随分とたくさんの人たちがいる。>と記述している。彼には原告と同じ想いを抱く仲間や弁護士仲間がたくさんいて、傍聴席を満席にしたり社会運動を起こしたりする。裁判官に与える印象は多大であるという。

2015年出身大学の龍谷大学から「龍谷賞」を受賞するほど、弁護士活動を評価される。

また、竹下弁護士は目が見えないことを不幸とも弱みだとも思っていないように思える。自分に劣等感を抱かず、自分や他者の尊厳を大切にしている。この人権感覚はどこで培われたのだろうか？何度考えても凄いと感動する。

人は一人一人何らかの不便を持ち合わせて生きている。視覚・聴覚・脳の機能などに障がいを持つ人、障がいと言えないまでも目が見えにくかったり耳が聞こえにくかったりコミュニケーションを苦手とする人など。障がいなどを持つ人の不便さは誇大に意識し、さらに善悪を付けて観ていることがある。孫が誕生したとき（障がいがなくてよかった）と安堵する自分がいた。ぞっとしたが否めない事実であった。優性思想は私を含め一人一人の心に内在し、その一人一人が社会を構成している。だからこそ互いに「潜在的に抱く優性思想」があることを認め、それが発露しにくい社会体制を創り上げたいと願っている。

竹下義樹弁護士が社会に与えた影響は、一人一人の心にある優性思想に気づかせ、社会制度を是正していることにあるのではないかと考える。

彼はまだ御年67歳。いわゆる社会的弱者と言われる人々の“声なき声”に耳を傾け“想い”を理解し、裁判を通して救済し、社会に変革を起こし続けてほしいと切に願う。(M)

◆ 3月読書会 ◆ 今年の一冊

本は、それ1冊でもおもしろいのだが、並び順によっては、また別のおもしろさが加わることもある。

3月例会は、会員がそれぞれ1冊を持ち寄って、10分余りで紹介する。

選んだ本が重なることが有りそうでないのだ。これだけの出版数だから当然かもしれないが。しかし、申し出の順番通りにした結果、お隣さんとの組み合わせで化学変化を呼び込み、それぞれが別の意味を楽しませてくれることがある。

今回、それを感じたのは『日の名残り』と『見えない 収録 「窓の観察」』が続いて紹介されて、私だけかもしれないが、密かに世界の内と外を見た感じがして愉快だった。両作品に共通しているのは、私にとっては「窓」である。

『見えない』の方は、「建築と日常 別冊」という窓の写真がたくさん付いたものであった。紹介されたTKさんが、「この窓の中にはどんな暮らしがあるのだろうかと思う」といわれたから、窓を外から眺めたり、並んだ窓を下から見上げたりする光景を思い浮かべた。

『日の名残り』の方は、私には窓のない土壁が取り囲んだ空間を思い浮かべさせられる。少し前に「穏やかに身の回りを取り巻いていた土壁の泥が、次第に積み重なって高さを持ち、頭上を覆い、いつのまにか四方から土壁にとり囲まれてしまった。身を圧迫しているのではないのに、息苦しい。ただ一カ所だけ狭い空間が積み残されていて、そこから夕方の光が差し込んでくる。」と感想文に書いたくらい窓がないのだ。土壁の中には広いお屋敷や開けた田園や丘が描かれ、けっして狭苦しい話ではない。けれども、出入りできたり、他と関係付けたりする窓がないのだ。「窓がない」というと、ライプニッツの「モナドには窓がない」という言い方が上がってくるが、そのくらい、他界とは無関係の執事の過去の回想の話だ。

窓は、いろいろな形、いろいろな位置があり、建築関係の人には重要なポイントだろう。窓の設計を考える人、かたや、窓のない意識空間を言葉によって描く人、たまたま並んだこの2冊の本が、本には縁組みもあると言っているようでおもしろかった。もちろん、『忘れられた巨人』が、例会の先頭をきって話されていたのだから、同じイシグロ作品として「記憶」という言葉で『日の名残り』は濃い組み合わせを作っていたことになる。

イシグロ作品は、人間の記憶を問題にして書かれているが、人間は、書き留めておかなければ忘れてしまう生き物でもある。「忘れてはいけない」と忘却の中に埋もれそうな事柄を掘り起こした『灰色の地平線のかなたに』は、『忘れられた巨人』の実写版の如く、歴史的な事実を小説として読ませる。20世紀の50年間、バルト三国で何がおきていたのか、書かれなければ忘れられたことだろう。久しぶりに参加されたM子さんは、「1冊」では足りないからとたくさん本を挙げられたが、その中に『知らなかったぼくらの戦争』もあった。忘れてはならない戦争を、書くことによって風化させないでおこうという営みが続いている。

描かれたおかげで、遠い日本にまでその美貌が伝わったのが、シシィと愛称でよばれる『皇妃エリザベート』だ。この本を紹介してくださったYAさんは実物の肖像画を見られたそうで、その肖像を描いたペーパーナプキンを参加者は頂いた。「ほんと　きれいな人。帰って飾りましょ！」と、おもわずざわめいた。こちらは、19世紀後半から第一次世界大戦に突入する王侯貴族の世界だ。しかし、美貌のシシィ（エリザベート）には自由はなかっただろうと、YAさんは語られる。夫のフランツ・ヨーゼフは戦争に多忙で、妻の美貌を愛でている暇はなかったか。

「たぬきおやじ」という愛称(?)を持つ徳川家康が、いかに人の力を発揮させるのが上手だったかと語られたのはR子さん。『家康　江戸を建てる』では、関東平野を制御して、江戸を形作っていった市井の人々を取り上げて語られた。この本の話聞いて、参加者がニコニコしたのは、内容以外に、「この本を間に置いて、主人と会話が成立するのよ」という話が出たときだ。みんなの笑顔を見ると本にも色々な効用があるようだ。

自分の生き方や、考え方を本によって知っていくのは、本の大きな力だと言われている。『余命』『たちなおる力』『人はなんで生きるか』や、M子さんの持ってこられた数冊のノンフィクションにも、それぞれの人の抛り所とする言葉が埋め込まれているようだ。五木寛之、辻　仁成、レフ・トルストイの語りかけを、紹介された方がその方の言葉として伝えてくださって、小説とはまた違った味をかみしめた。

会員全員による持ち寄り本の紹介タイムは、バトルを伴わないビブリアバトルのようで、なかなか良いものである。この1年、たくさん読んだ末に選ばれた1冊は、そこに至るまでの物語があるわけで、それを聴かせてもらうのも得難いことだった。

講師　吉川　五百枝

2017年度 今年の一冊

◆「アピールポイント」

名前	書名	著者・編	発行所	発行年
<C>	『忘れられた巨人』	カズオ・イシグロ作 土屋 政雄訳	早川書房	2015
	【出版社紹介から引用】 アクセルとベアトリスの老夫婦は、遠い地で暮らす息子に会うため長年暮らした村を後にする。若い戦士、鬼に襲われた少年、老騎士…さまざまな人々に出会いながら、雨が降る荒れ地を渡り、森を抜け謎の霧に満ちた大地を旅するふたりを待つものとは一。失われた記憶や愛、戦いと復讐のこだまを静謐に描く。			
<YA>	『皇妃エリザベート』	マリールイーゼ・フォン・インゲンハイム作	西川 賢一 訳集英社文庫	1999
	◆バイエルンの貴族に生まれ、その時から彼女の運命が定められている。数奇な人生を知る。これ以上無いと思われる程の物理的な豊かさの中で、聡明な彼女の選択に少しホッとさせる。時代環境に翻弄される美しいシシーの姿がボーと浮かぶ。			
<TK>	『見えない』収録『窓の観察』 (建築と日常別冊)	柴崎 友香	長島明夫	2012
	◆建築のために描かれた小説。自分の窓の風景がある日パッと変わり、向かいのアパートの窓が見えてくる。窓の風景、暮らしぶりを見ながらうつろいながら感じる日々の生活を楽しめる。建築に関心のある人には楽しい作品をたくさん書いているので楽しいと思う。			
<M>	『日の名残り』	カズオ・イシグロ	早川書房	2001
	◆講師の先生の全部が窓ありと無しの発想で話してくださることにより、物の見方が180度変わったことを通して、考え方、思いのせまさを感じました。			
<KT>	『余命』	五木 寛之	祥伝社	2015
	【出版社紹介から引用】 人生百年を生きるためには、どう身構えたらいいのか。いかに心がけたらいいのか。長いようで短い、短いようで長い余命をどう過ごしたらいいのか。余命をただの残された時間ととらえるのではなく、前向きに考えたらどうだろう。その考えのもとに、新しい「余命観」を探りだしたのが本書です。			
<E子>	『日本語が亡びるとき』 英語の世紀の中で	水村 美苗	筑摩書房	2008
	【出版社紹介から引用】 豊かな国民文学を生み出してきた日本語が、「英語の世紀」の中で「亡びる」とはどういうことか？日本語をめぐる認識の根底を深く揺り動かす書き下ろし問題作！			
<T>	立ち直る力	辻 仁成	光文社	2018
	◆中学生の息子に向けて書かれたアドバイスなので、とても分かりやすく読みやすい本です。うつむきそうになった時どのページでもいいので開いて読んでみてください。元気をもらえます。			
<N2>	『わたし いる』	佐野洋子	童話社	1987
	【出版社紹介から引用】 「あかちゃん死んじゃうよ」「死なないよ、絵だもん」じろちゃんを描く、かわいそうなあかちゃんに泣いた日。「おかあさんほんとうはきつねなんだ」正体をみてやろうとまとわりついたわたし。宝物のような遠い小さな記憶をたぐり寄せ、絵入りで送る心とむ7編。切なく愛おしく不思議に満ちた幼い日のアナタがいます。			
<Y>	『無常の神が舞い降りる』	志賀 泉	筑摩書房	2017
	【出版社紹介から引用】 避難区域に寝たきりの母と留まった「俺」が、誰一人いない町で封印された記憶をたどっていく表題作のほか、避難先の学校でフクシマの映画を作ることになる17歳の女子高生を描く「私のいない椅子」を収録。南相馬出身の作家がはなつ、震災文学の決定版！			

<p><K子></p>	<p>『琥珀の夢 上・下』 小説 鳥井信次郎</p>	<p>伊集院 静</p>	<p>集英社</p>	<p>2017</p>
<p>【出版社紹介から引用】 サントリーの創業者、鳥井信次郎の生涯を描いた長編小説である。彼の人生は洋酒文化を日本に定着させることに捧げられた。鳥井がいなければ、ボージョレ・ヌーヴォも定着しなかったに違いない。</p>				
<p><KW></p>	<p>『人はなんで生きるか』 世界名作選</p>	<p>レフ・トルストイ 中村 白葉(訳)</p>	<p>新潮社</p>	<p>1998</p>
<p>【出版社紹介から引用】 作者は晩年いちじるしく宗教的・道徳的傾向を深めていた。そして苦悩に満ちた実生活を代価としてあがなったかけがえのない真実が、幾多の民話となって結集したのである。作品には、素朴な人間の善意に対する確かな信頼が息づいている。</p>				
<p><S></p>	<p>『灰色の地平線のかなたに』 『凍てつく海のむこうに』</p>	<p>ルータ・セペティス 野沢佳織(訳)</p>	<p>岩波書店 "</p>	<p>2012 2017</p>
<p>【出版社紹介から引用】 第二次世界大戦中のロシア——画家をめざしていた15歳のリナは、ある晩突然、ソ連の秘密警察に捕まり、シベリアの強制労働収容所へ送られる。母親と弟、仲間とともに、極寒の地で過酷な労働と飢えに耐えながら、父親のため、そしていつか自由になれる日を信じて絵を書き溜めていく。</p>				
<p><R子></p>	<p>『家康 江戸を建てる』</p>	<p>門井 慶喜</p>	<p>祥伝社</p>	<p>2016</p>
<p>◆私 65 歳，夫 68 歳，義母 97 歳。義母は認知症があり，同じことを何回も話す。でもそれはそれで楽しい会話で，毎日笑いが絶えない生活でした。しかし，義母の病気が進み，今年初めから施設に入所することになり，夫との2人暮らしが始まりました。</p> <p>そうした時気付いたのが会話の少なさ！！そこで2人が簡単に読め感想を気軽に言い合える“読書”を夫に提案し，初めにこの本を選んでみました。</p> <p>『家康 江戸を建てる』は秀吉から関州をさずかれと言われ，湿地と分かっていて江戸作りをした家康を軸にして，プロジェクトごとに時系列どおりでなく，登場人物の人間像もあたたかく出していきながら描かれていたので，楽しく読むことが出来ました。江戸が完成されるまでを「お金」「水」「天守」「石垣」の専門家を集め，一人一人に任せ，全体をとりしきる家康はまさに江戸を建てる人と感じました。人物の巧みな使い方に家康の人間を感じました。</p> <p>夫と感じたことを話し合えるよい本だったと思いました。</p>				

2017年度 今年のおすすめ本

<M子>	『道をひらく』	松下幸之助	PHP研究所	196 8
	<p>◆命ぜられた通りにやって、その通りうまくいったのだから、もうそれでよいと考える人。いやたとえ命のままにやったとしてもその結果は一応きちんと報告しなければならない。そうしたら命じた人は安心するだろうと考える人、そのなんでもない心がけ、ちょっとした心の配り方の違いから両者の間に信頼感に対する大きな開きが出てきている。仕事には知恵も大事、才能も大事。しかしもっと大事なものは些細と思われること、平凡と思われることも疎かにしない心がけである。難しいことはできても平凡なことではできないというのは本当の仕事する姿ではない。</p>			
	『地域でいちばんピカピカなホテル “人も施設も輝き出す”すごい仕組み』	宝田圭一	あさ出版	201 7
	<p>◆あいさつ、そうじ、電話を変えるだけでスタッフが生き返り、お客様が笑顔になった。ホテルだけでなく、多くの会社再生のヒントが詰まっている。</p>			
	『徳は孤ならず 日本サッカーの育将 今西和男』	木村元彦	集英社	2016
<p>◆徳は孤ならず 徳不孤 必有隣 本当に徳のある高潔な人物は決して孤立したままではいることはない。必ず理解してくれる隣人たちが集まってくるという意味。</p>				
『一枚の切符 あるハンセン病者のいのちの綴り方』	催 南龍	みすず書房	2017	
<p>◆歴史を忘れ去ってはいけない。特にそれが直視することの辛い出来事であったならば、なおさら忘れようとしてはならない。なるほど、どのような出来事も忘れ去ることができるかもしれない。しかし忘れ去られた悲しい事実は私たちの潜在意識の中にもぐりこみ絶え間のない不安・理由を忘れ去られた不安としてざわめき続ける。私たちは忘れることによって救われるのである。</p>				
『夕張再生市長』 『知らなかったぼくらの戦争』 『ナビラとマララ』 『スクラップ・アンド・ビルド』 『鹿の王 上、下』 『アラスカ 光と風』 『この嘘がばれないうちに』	鈴木直道 アーサー・ビナード 宮田 律 羽田圭介 上橋菜穂子 星野道夫 川口俊和	講談社 小学館 講談社 文芸春秋 KADOKAWA 福音館日曜文庫 サンマーク出版	2014 2017 2017 2015 2017 1995 2017	

読書会感想文 平成29年度

平成30年5月 発行

編集・発行 市立竹原書院図書館

〒725-0012 竹原市下野町3308番地

電話：0846-22-0778 FAX：0846-22-1072